

青年期の社会的自立と責任感の形成

神田 嘉延 [鹿児島大学稲盛アカデミー特任教授]

Social independence of the youth and the formation of the sense of responsibility

KANDA Yoshinobu [Professor, Kagoshima University, Inamori Academy]

キーワード：知的自己中心性からの解放、権威的ナルシズムと拝金主義、
青年期の価値選択、青年期のアイデンティティの危機、
人間的連帯における愛の役割

目次

はじめに

- (1) 現代社会における責任感の問題所在
- (2) 国家の責任問題の所在とリーダーの問題性
- (3) 個人と社会的役割の責任の問題所在
- (4) 信念倫理と責任倫理の問題所在

1, 青年期と責任感形成

- (1) 青年期の責任観の形成と知的自己中心性からの解放
- (2) 青年期の仲間集団形成と責任感形成
- (3) 青年期の社会的自立の教養性と責任感形成

2, 青年期の発達課題としての社会関係と人生観形成

- (1) 青年期の人生観形成と社会的責任観
- (2) 価値の選択と青年期

3, 青年期とアイデンティティの危機

- (1) 青年たちの学びの環境と人間的信頼の形成
- (2) 青年期のアイデンティティの危機と歴史の変動
- (3) 勤勉感の成長とものづくりの青年教育
- (4) 青年期における民主主義的人格の形成とアイデンティティ

4, 権威的ナルシズムと拝金主義的非倫理

- (1) 現代の拝金主義とモラル問題
- (2) 善意と正義の形成

5, 孤独の解放と人間的連帯における愛の役割

- (1) 青年期と愛の能力形成
- (2) 青年期における真の愛と偽善の愛のみきわめ

まとめ

はじめに

(1) 現代社会における責任感の問題所在

責任感とは、社会的な役割との関係での倫理としてみていくことが必要である。人は、自分ひとりで生きているのではなく、愛する人びとに支えられ、家族に支えられ、友人達に支えられ、地域や学校で支えられ、職場や社会に支えられるなど、様々な人々に支えられて生きている。そして、家族、仲間、職場や地域のなかで自分の役割を發揮して生きている。人間は、社会的に生きていることが本質である。

個々の自由意志による社会的な契約は、人間的に生きていくうえで不可欠なことである。親として、子育ての責任がある。また、親として家族の暮らしを豊かにしていく責任がある。これらは、人間的な喜びの中での責任である。仕事をとおして社会的役割を發揮していくことは、自己を高めていく過程であり、そこでの人生の充実感を伴った性質をもつものである。

人間的に生きることは、自分の役割を發揮できることである。親としての子育ての喜びは、親としての役割發揮である。働くことは社会での自己の役割の發揮であり、自分が社会と関わる生きる喜びでもある。責任観とは個々の社会的役割を果たしていく倫理観であり、人間的に生きる証である。しかし、この社会的役割責任は、人間のもっている怠惰性と我欲との心の葛藤のなかで成就していくもので、そのための心を常に鍛えていく課題が存在しているのである。また、詐欺師のように意識的に怠惰と我欲によって、人を騙し、嘘をつくことに平静さをもって人間関係をつくる人びともいることも現実である。そこには、社会的な倫理ではなく、人を騙すことが我欲の実現になる。努力せず、怠惰を基本にして、人間が考えるという目的意識性を巧みに利用する。そこでは、騙しの「知恵」が大いに活用されているのである。このことによって、支配欲、権力欲、金銭欲を得ようとするのである。ここには、社会的役割責任という価値観は存在せず、怠惰と我欲、権力欲と金銭欲が支配する世界である。

近代社会は、契約の発達したなかで、人間関係が複雑につくられていく。現代では、自由の意志に基づく契約の約束を果たしていくことが人間的信頼関係をつくっていく基本である。契約は、押しつけられたものではなく、強制的なものではない。それは、自己の意志によって、自分の責任を社会的に役割をもっていく行為である。個々の日常的な暮らしでの責任観は、この約束を履行していく感情であり、その努力意志である。人びとの暮らしのなかでの責任感とは、契約という行為における知恵をつけていくことである。

それには、人間性を身につけ、計画性と、様々な状況判断のできる幅の広い教養が求められていくのである。契約を確実に実行していくには、決断力も大切である。まわりの人間関係をみながら実践を怠っていくことは、不履行に対する怠惰と、いいわけづくりにすぎない。

現代人が社会の一員として生きていくうえで、責任感とは不可欠な要素である。人間的に信頼され、社会的に信用を得ていくうえで、責任を果たしていく感情と努力は、大切なことである。本論では、青年期の社会的自立としての位置づけから、責任感の形成について明らかにする。

本論では自己責任という意味の責任概念はとっていない。自己責任は、責任関係を社会的な人間の信頼関係の感情ということではなく、貧困化などの問題に個人的問題に還元していき、真剣に生きている人々に対して人間的な信頼関係を損なっていくことがあるからである。本論での責任論は、自己中心的、自己利益的な怠惰や詐欺、権力・権威志向から自己の役割を先延ばしするなどの問題点を責任感欠如の人格形成として問題にしたかったためである。そのような人格形成がどうして生まれてくるのかという問題意識に基づいているのである。むしろ、貧困化は、自立への課題を展開していくことが必要である。

責任感とは、個々の社会的役割の自覚のもとに、約束を果たすという人間と人間の社会的な信頼的感情関係である。責任観が強くなっていくことは、その約束ごとの履行を社会的役割のなかで自覚していくことであり、その履行していく実践のなかで使命感も生まれていくのである。青年期の課題克服として、社会的に自己の役割を選択していくことが大切であり、この大きなひとつとして、職業の選択がある。職業の選択も社会的契約のひとつである。その約束履行は仕事になっていく。

しかし、仕事に就けないニートなどのように、この関係を結べない青年もめずらしくないのが現代である。自己を絶対化しての知的自己中心性から約束そのものを果たせないこともある。また、詐欺行為のように目的意識的に約束を最初から果たさない場合もある。

責任をもって約束を果たしていくことは、個々人や当事者の主観的なものではないことを見落としてはならない。約束は、社会的な役割遂行である。原子力発電事故のように当事者が想定していなかった問題についても鋭く問われる場合がある。また、製造物責任のように、欠陥がある商品をつくって、消費者に損害をあたえたときも問われる。責任を果たしていくという次元は、最初から約束を果たしていかないという自己中心的な行動の無責任性と詐欺行為のように目的意識的に人を騙すための約束という次元とがある。

これらのことと、原子力発電事故の重大な人災という場合は、無過失責任ということで、損害賠償の義務が求められる。問題の重大性によつての責任の次元は大きく異なる。注意義務を怠ったという過失責任も原子力発電の場合は同様である。甚大な被害をもたらすことの責任の重大性の自己認識が求められる。それは、日常生活における個々の人間関係による責任性とは次元の異なる問題である。

責任を果たしていくことは労働観そのものの重要な要素である。仕事を成し遂げていくことは、社会的な責任関係である。仕事を成し遂げていくうえでは、困難がつきまとうのであり、マニュアルどおりに、言われたことだけを、前例主義的に仕事をするだけではない。労働は、課題にむかって、目標にむかって成し遂げていく側面が大きいのである。労働には、工夫や創造がつきまとうのである。それは、困難をもったり、ときには、事故の危険の可能性もある。

弱肉強食競争による立身出世主義は、仕事の社会的役割の遂行以上に自己の地位獲得、地位の保全に強い関心を示す。この志向は、責任観の形成を著しく減退させていく。社会的役割を担わせられている自己の責任よりも、主要な関心は、上司に評価させること、好かれることと、まわりの人間関係の評価に狂奔する。自己の地位の役割からの社会的な責任以上に、立身出世に関心をもつ。それは、仕事の業績以上に立身出世の人間関係になり、ここには、昇進をめぐる閉鎖的な派閥関係が生まれ、学校歴からの学閥もひとつの大きな要素になってくる。責任観の欠落していく社会的状況がつけられていくのである。

約束は、個々人との関係における側面と、組織的な関係における側面がある。組織的な側面は、国家、地方自治体、企業、大学などの約束履行の問題がある。責任感とは約束を履行していく倫理観である。組織が個人、及び関係者に対する約束履行として、国家や企業の問題がある。

個々人の責任とは、社会的な存在という人間の尊厳ということから相互の約束をはたしていく義務関係の問題である。人間の尊厳は、個々の約束履行のなかで守られていくのである。「家族生活における個人の尊厳と両性の平等」「勤労の権利」「財産権の保障」などの人間の尊厳に基づく社会的な行為は、個々人の責任ある約束履行がなければ保障されていかない。約束の不履行には、怠慢性と目的意識的な人を騙すことにもなる。怠慢性と詐欺は、責任観がないということでは共通している。約束について怠慢になる人格がなぜ形成されていくのか。人を騙す人格がなぜ形成されていくのか。これらのことは、市民的な道徳の形成に鋭く問われていくのである。約束の不履行については、さまざまな事情が伴う。約束それ自体の計画の甘さもある。誠実に努力してもかなわないこともある。しかし、道義的に、それでも問われる。

約束の不履行には、結果責任としての民事的な損害賠償責任とがある。また、目的意識的な人を騙すための詐欺などの刑事的責任があるが、これらは、法的な責任問題である。結果責任には、当然ながらの説明責任が伴っている。私人間での権利関係の責任の遂行の義務は、当事者間の自治に委ねられているが、詐欺的な行為は、刑事的な問題として司法で審判されていくのである。個々人の責任の問題は、人間の尊厳と深く関わっているのである。約束を最初から履行する意志をもたない詐欺行為などは、それがひとつの金銭を得るための「仕事」としての感覚から、責任観を全くもたないのである。詐欺によって、相手がどれほど不利益を被るのか、そのことによって、相手の人生がどん底状態に突き落とされようとする関心を示さないのである。

個々の自由意志による社会的な契約は、近代社会で生きていくうえで必要なことである。その自由の意志に基づく契約の約束を果たしていくことは、大切な課題である。約束は当事者間の平等な自由を生み出す環境のもとに結ばれていくものである。自由な意志で結ばれた約束は、責任を果たしていくために拘束力をもっていく。

仕事に就いていくことは、社会的な契約であるが、それは、個々の労働契約という次元ばかりではなく、その人が社会的に役割を果たして、社会的に信頼され、生き甲斐をもっていくという人間的な喜びを遂行していく場でもある。人間的な喜びを発揮できるような職場の環境は、極めて重要である。

青年は、自立していく過程として、職業に就いていく。そこには、未熟な側面が多々あることは、成長への努力を醸成していく環境が不可欠なのである。青年は、旺盛なチャレンジ精神をもっているのを事実である。青年は新しい発想を持ち、創造的に仕事をしたがるのが一般である。成長への努力を醸成していくためには、青年自身が学習し、十分に日々の生活のなかでリフレッシュしていけるような環境が求められている。それには、彼自身の余暇時間を保障していくことが求められている。

青年自身が未熟であるがためという理由や、青年自身のチャレンジ精神による努力心を利用して、長期間にわたって、十四時間、一五時間という睡眠時間も保障しない非人間的な長時間労働を強いていることは、青年を使いすてにしていくことになる。社会的な労働

のルールを約束どおり果たしていくことは、青年にとっての成長には欠かせないことである。現代はなかなか青年自身の仕事がないのが現状である。とくに自分の好きな仕事になればなおさらである。青年は、自分の可能性を信じて、必死に努力していく。この青年の真摯な精神を非人間的な長時間労働によって、使い捨てにするならば、かれらに仕事に対する失望を与えていくだけであり、ときには過労死という悲劇を生むのである。ここでは、自己の利益中心としての経営の倫理性が鋭く問われている。

責任観は、社会的なルールのもとに約束を履行していく感情であり、その努力意志である。それを履行していくことで、真の人間的な喜びを感じる感性をもっていることである。責任感を達成していくには、契約という行為における計画性と、様々な状況判断のできる幅の広い教養と専門性が求められている。契約を確実に実行していくには、決断力も大切である。まわりの人間関係をみながら実践を怠っていくことは、不履行に対する怠惰のためのいいわけづくりにすぎない。

「通常われわれは道徳的要件をわれわれに課せられた拘束と考えるが、そうした拘束をわれわれは、自分に有利なように、故意に自ら課することが時としてある。したがって、約束行為は、こうした環境の下で、自らの目的を促進するような責務を故意に負うという公然たる意図をもってなされる行為である。われわれはこの責務が存在することを望むし、しかもその存在が知られることを望む。また、われわれは、われわれがこの絆を認識し、そしてそれを守ろうとしている。ということ了他の人々に知ってもらいたいのである。そこで、約束行為の実践をこの理由から利用したとき、われわれは公正の原理によって、約束したとおりに行動する責務を負っているのである」。(1)

以上は、ロートの正義論からの引用である。約束行為を履行していくことは、近代の自由と平等という公平の論理や生来の義務とうことからの正義の共通概念であり、公共意識という近代社会以降の人類の共同資産である。

現代人が社会の一員として生きるうえで、責任感是不可欠な要素である。人間的に信頼され、社会的に信用を得ていくうえで、責任を果たしていく感情と努力は、大切なことである。

現代社会は、とかく、当面の社会的に担わされている仕事以上に、自己利益や自己保身、立身出世の人間関係が重視される風潮がある。ここには、自己利益と地位昇進、保身をめぐっての閉鎖的な派閥関係が生まれてくる。そこでは、学校歴からの学閥もひとつの大きな要素になってくる。自己利益や自己保身のための集団は、閥集団に奔走するようになる。自己の社会的な役割に対する責任観が第一義的に働くのではなく、自己利益と自己保身が第一義的になるのである。まさに、無責任の状況が作りだされ、社会的な約束を果たしていくための問題解決の緊急性の先送り現象がうまれていく。

(2) 国家の責任問題の所在とリーダーの問題性

人間は、社会を維持し、発展していくために、古来から統治機構をつくり、経済活動を続け、文化的な営みをもってきた。

統治機構は、共同体的な村落社会の秩序から近代的な高度に複雑な社会機構を伴った国家組織に至るまで人間は統治機構のなかで、それぞれの役割をもって生きているのである。

現代の統治機構には、国家があり、地方自治体がある。そこには、為政者がいる。統治をしていく意志決定機関には政治家の役割は大きいのが現代の議会制民主主義である。

近代社会の発展によって、経済的活動は、個々の自営的な家族経営から企業へと展開していった。さらに、国家や地方自治体が公営的な事業として経済的な活動に参加し、国家や地方自治体の財政的な活動が人びとの経済的な生活に大きな位置を占めていくようになる。

そして、企業や国家・地方自治体以外の非営利的な事業が発展していく。統治機構のそれぞれの社会的リーダーは大きな社会的役割を果たしている。この社会的役割は、特別の意味をもっており、その責任は、日常的に社会的な役割をもって生きている人びと異なって、特別に大きな権力と権威をもって、人びとの暮らしを支配していく。人びとの暮らしの関係での役割とは異なって、対等な責任をもつ人間関係ではなく、特別の意味をもっての国家における政治家の役割責任、官僚の役割責任、公教育の教育者の役割責任がある。

当然ながら、国立大学の教員は、最高学府として公教育の大きな位置を占めているのであり、その社会的役割責任は、特別の意味をもっている。従って、特別に強いモラルが要求されていく。

しかし、「学問の自由」という権力からの自由ということを目撃と権力欲の自由ということに錯覚して、社会的な役割責任から逃避していく傾向が一部にみられる。それは、社会的な側面からみれば、国民に対するひとつの詐欺であり、騙しの世界である。これらは、一部の国立大学におけるパワーハラスメント、セクシャルハラスメント、教員の授業放棄、約束の研究放棄、恣意的な権力的単位認定、脅しと暴力による脅迫行為など数々の国立大学の不祥事のなかから明らかになったことである。それらは、長年の陰湿の管理体制のなかで、その隠蔽体質をもっていたところが少なくない。不祥事が起きると、二度と繰り返してはならないということで、制度の問題が強調されていく。不祥事を起こした組織や関連機関のすべての人々に管理強化が被さっていく。まさに管理主義が横行していく。そして、形式的な大学評価によって、問題が覆いかくされてきた場合が少なくない。

不祥事の最大の問題は、責任観という倫理の問題であり、決して制度による欠陥が本質ではない。責任観という倫理の問題は、重大性に応じて処分や社会的制裁が行われていくことが社会的な秩序をまもっていくうえで当然なことである。また、不祥事を起こした本人自身も、人間的に高まっていく修行の機会を保障するための最も大切な教育的な手段である。それは、大事な更正の手段である。しかし、不祥事に制度問題に膨大なエネルギーを費やしていく。そこでは、とかく処分や社会的制裁がおろそかにされがちになっていく。

特別の職責をもっている社会的な役割は、主観的なものではなく、鋭く結果責任と説明責任が伴っている。国民は、国家に対して、市民社会における契約責任という意味ばかりではなく、特別の国民の文化的で豊かな生活と安全で暮らせるという利益保全と幸福実現への役割責任を期待しているのである。国の機関は、その職責を特別に担っているのである。

国家としての社会的役割責任に、国家や地方自治体における政治家の役割責任は大きい。さらに、国家や地方自治体の官僚の役割責任があり、民主主義的人格の形成と国民の教養を高めていくために、高度な専門性と科学・技術の発展により国民の暮らしの向上と安全、

幸福を実現していくために、国立大学や地方の公立教員の責任などがある。

企業の社長の役割も事業体が大きくなればなるほど、その役割責任は、より強くなっていく。それは、民間という側面をもっているとはいえ、国家に準じて大きな社会的な役割責任をもっていくのである。

約束は、個々人との関係における約束という側面と、組織的な関係における側面がある。組織的な側面は、国家、地方自治体、企業、大学などの約束履行の問題がある。責任感とは約束を履行していく倫理観である。組織が個人、及び関係者に対する約束履行として、国家や企業の問題がある。

個々人の責任とは、社会的な存在という人間の尊厳ということから相互の約束を果たしていく義務関係の問題である。人間の尊厳は、個々の約束履行のなかで守られていくのである。

ところで、国家における責任において、個人の問題がないかというところではない。とくに、リーダーとしての個人の役割がある。国家の責任とは、憲法のいう国民の命と暮らしを守り、福祉の向上、国民の幸福を充実させていくための条件整備の義務がある。国家の責任は、国民の憲法で保障された権利と公共の福祉を履行していくことである。企業の社会的責任は、経済活動をとおして社会的に貢献していくことである。国家にしても企業にしても、それぞれの社会的役割は異なるが、社会的責任というモラルは共通の基盤をもっている。

国家はそれぞれの役割責任があり、その役割を担っているリーダーは、特別に重要な意味がある。個々の役割遂行はもちろんのこと、リーダーは、約束を履行していく責任性がある。その責任性は、組織におけるリーダーとしての個人の問題になっていく。ここには、組織一般の責任という次元ではなく、役割を担っているリーダーとしての個人責任が明確にあることを見落としてならない。リーダーの職務責任性は、決められたこと、マニュアル化したこと、合意されたことを履行することだけではない。国民の命を守るという危機対応についてはマニュアルどおりにいかない場合も少なくない。

国家のリーダーは、それぞれの役割部署において、危機の問題に対する真摯な創造的な工夫が要求され、様々な関係者、専門家からの機敏な情報収集と決断力が求められるのである。危機に対応する国家や企業のリーダーには、的確に即座の決断力が必要になっていく。このためには、総合的な教養と様々なネットワーク網と、信頼できる人間関係の構築が普段から求められる。そこでは、人間的に尊敬される人格性が不可欠になっているのである。

マスコミのキャスター、科学者などは、社会的影響が特別に強い個人であり、自己のもっている社会的な影響を十分に考えての社会的な行動が求められる。リーダーという組織的な側面ばかりではなく、個人としての役割の大きな職業的地位の人々も存在することを見落としてならない。職業的に個々の社会的役割を自覚して、その役割を遂行していくことは責任を果たしていく大きな位置を占めている。

瀧川祐英は「責任の意味と制度」という著作のなかで、責任概念は多義性をもっており、それを責任実践の構造を中心として整理したのである。このために責任が問題となるのはいかなる状況においてか、この状況において、責任実践はいかなる構造を有しているのかという問題意識をもっている。前者の責任状況は、自動車事故での損害賠償のような過去

責任状況と、規範違反行為に起因しない将来の世代の未来責任状況と大きく区分されるとしている。過去の責任状況については実態としての加害者自身が本人であり、結果がでているので明確に問責を問うことができる。しかし、未来の世代に対しては、本人自身は直接加害者ではなく、責任の負担の共有として問われるのである。ここでは自由な意志による契約の不履行としての加害者ではないのである。後者の世代的に継承されていく責任状況は、戦争責任などで民族的、国家的な一員として問われる次元のことである。⁽²⁾

この未来の責任状況については、前者の直接的な加害者、約束の不履行者と異なるので問題の本質が異なる次元になる。瀧川祐英は、責任の分類についてヤスパースの罪と責任論からの刑法的責任、政治的責任、道徳的責任、形而上的責任の四つの区別を参考に出発している。

ヤスパースの罪と責任論で注目するとことは、本人の責任を強調しているところであり、道徳的な罪と責任では、「命令は命令だということを決して無条件に適用しない。命令された場合でも（危険、脅迫、恐怖の程度如何に応じて酌量すべき事情は容れられるが）、むしろ犯罪はどこまでも犯罪であるのと同様に、いかなる行為もまた道徳的判断に服している。審判官は自己の良心であり、また友人や身近な人との、すなわち愛情をもち私の魂に関心を抱く同じ人間との精神的な交流である。形而上的な罪、そもそも人間相互間には連帯関係というものがあり、これがあるために人間は誰でも世のなかのあらゆる不法とあらゆる不正に対して、殊に自分の居わせたことか自分の知っているときに行われる犯罪に対して、責任の一半を負わせるのである。私が犯罪を阻止するために、自分でできるだけのことをしなければ、私にも罪の一半がある」。⁽³⁾

責任論の区別を瀧川は、4つの区別からではなく、責任の形態として、責任規範、責任原因、答責者、問責者、責任対象、責任負担と6つの次元に分類している。⁽⁴⁾

この責任の分類は、瀧川ものべているように責任とは何であるのかという問いに答えるものではないとしている。そして、有責責任のように規範に違反したものに帰属させる責任追求がはっきりと加害行為者にできる。負担責任は、直接に違反していないものも負担を強いられる。この負担責任は、国家の損害賠償のように転嫁可能性をもつ責任である。有責責任は、転嫁不可能である。

責務責任は、立場や地位役割における役割責任である。ここでは政治家の責任、官僚の責任、学長・校長の責任、教育者の責任、親の責任などである。

不合理な感情的要素や情緒的反応が紛争の法的な解決を困難にしていると常松淳は「責任と社会」のなかでのべている。心や感情に対する社会的関心の高まりは、被害者の精神的な修復の支援制度が生まれていった。専門家による「心のケア」という形態や、学校におけるカウンセリングのように上から与えられるサービスとしての「心のケア」の蔓延という社会の心理学化は、事件の問題を複雑にさせている。社会の側からの溢れる感情が法システムの機能を妨げているというのである。法が心や感情をそれ自体あつかうべきではないと常松淳はのべている。しかし、心や感情の問題が法システムに対応を迫っているとき、法的責任も対処せざるをいえないと次のようにのべている。

「法システムが、例えば捜査や訴訟のプロセスにおいて当事者の「心」や感情に配慮するように求められる状況では、法的責任のあり方もまたこの圧力に直面せざるを得ない。このとき、得意な条件を備えた法的責任がこのような圧力にどこまで応じることが可能で

あり必要かという問題に対する考察が必要となるであろう」。⁽⁵⁾

法的責任と心の問題である道徳的な責任についての両者の接点を過失という帰責原理に常松淳は求めた。「本書では、法的責任と日常的・道徳的な責任との対立とのしばしば対立的な関係を（主として法的な枠組みの側から）捉えようとしてきた。それは、責任について社会学的に探求しようとするとき、両者の接点で何が生じるのかを知ることが不可欠だからである。不法行為責任は、それが過失という帰責原理を採用していることから、日常の道徳的な責任観念と重なりやすい」。⁽⁶⁾

法的責任の道徳化はどこまで可能かという命題に常松淳は、過失責任という帰責原理に求めたのである。責任感の問題は、過失責任という問題もひとつの大切な要素である。自分の行っていることや態度が相手に重大な損害を与えていくことを常に予測していく能力が求められているのである。この予測を認知していくための法や規則などのルールが利用されていくのである。責任感の問題は、法や規則を守っていくことに重なっていくのである。

（3）個人と社会的役割の責任の問題所在

人は誰でも自分が誰かの役に立ちたいと思っている。人は役に立ちたいことから、責任性はだれでも自然的にもっているものである。この自然性は、人間のもつ怠惰性と弱肉強食の競争なかでの自己利益や自己中心性が阻害していくのである。人間のもつ煩悩的な怠惰性は、誰かの役に立ちたいという生きる喜びの場が与えられていない度合いによって、拍車をかけられていく。

怠惰の克服の力は、人間関係、社会的な関係によって増していくのである。怠惰と休息や安楽の生活、余暇を楽しく生きるとは根本的に異なる。人間は、社会的に労働と余暇の循環によって生きている。余暇があることによって、労働場面の力の息吹が蘇ってくるのである。余暇なくして人間的に楽しく生きていくことはできない。怠惰とは労働と余暇の循環が断ち切られた状態である。自己の社会的役割を自覚できずに生きている姿である。

人はそれぞれ役割分担がある。それぞれに社会との関係をもっていくうえで自己の適正判断できるのである。適正に役割が配置されていない人は人間的な喜びに厳しさを伴っていく。したがって、その人なりの個性をもって社会との関わりをもっていくものであり、画一的に役割が存在しているものでは決してない。ここには、社会的役割の要請と、個人との関係がズレる場合が少なからずあるのである。自己選択において、自己をみつめていくことは大切な課題であるが、画一的な競争主義による偏差値的な進路選択の横行は、子どもが自分を深くみつめていく機会を少なくしているのである。

自分が社会のなかで役にたつことを自分自身が自由に選択し、自分の責任を自分自身で位置づけて生き方をみつめていくことは大切なことである。そして、自分が社会のなかで、地域のなかで、学校のなかで、職場のなかで、集団のなかで、家族のなかで、誰かの為に役にたっていると実感できることは大きな喜びである。責任観は、この人間的な喜びのなかで作られていく。責任感の形成と社会的に役にたっているという自尊感情を醸成していくことは青年期の自立的な教育として大切な課題である。

青年期は知的な自己中心性とアイデンティティの混乱した精神状況がみられるのが特徴

である。責任感は、社会的に自己の役割を自覚して、対人関係、組織的な関係、地域的な関係で約束を果たしていくという精神構造である。責任感に対立していく精神構造は、自己中心的に振る舞っていく自己利益の世界である。幼児期から少年期にかけて、遊びや集団的な人間関係によって感覚的自己中心性が克服されていく。しかし、現代は、ゲームやアニメに熱中し、受験競争による自己評価を強要される傾向が強いなかで、幼児期から少年期にかけての自己中心の克服も十分に育たない事例もみる。現代の子どもは、対人関係、社会的な関係による人間的成長が未発達のまま、青年期に入っていく例が少なくない。

青年期さらに大人になっても少年期に自己の殻で熱中したアニメやゲームが忘れられず、それを他人に強要していく精神構造がみられる。それに共感しない他人には怒りや蔑視をもって接するようになる事例も少なくない。

ここでは、知的自己中心性と幼児的自己中心性が重なって、自分の世界以外の人間の蔑視感がみられていくのである。つまり、青年期特有の知的自己中心性が加味されて自己の絶対化の精神構造が肥大化していく。相手のことを理解し、尊重していくことことよっての責任感の形成が起きにくい構造が生まれていくのである。

自己中心性の世界によって対人関係がうまくできない青年や大人が増えているのである。この増大傾向は、現代青年の一般的現象ではないことはいままでもない。青年をめぐる社会的な病理現象として一部分に生まれているのである。多くの青年は健全に育っている。現代は、分業化して、組織が巨大になり官僚化が進んで行き、ひとりで仕事をしているという錯覚に陥りがちになる。このような現状のなかで、目的意識的に協同での作業や協同の仕事の自覚による人間関係の醸成が必要になっている。競争社会のなかで心に傷を負った青年たちがよりやさしさと、相手を配慮していくことに気を使うようになっていく。このやさしさを協同の力へと援助していくことは、重要な課題である。

小学校時代から偏差値的な学力競争に追い立てられている子どもたちに、生きていくための諸能力をつけてあげることは極めて大切である。子どもや青年が学力をつけていくためにも集団のなかで、協同の活動を意識的に行う学習過程の創造が必要である。このためには、集団のなかで、自発的な協同活動という体験活動と学力の形成が大切である。

子どもや青年の生活や地域活動、自然活動のなかで学力をつけていくということは、子どもや青年自身の体験による学力の定着力という側面ばかりではなく、自己中心性を克服していくための協同活動の意味も含めている。学校での体験的な学習活動が地域との協力で積極的に展開されている意義は大きい。責任感の形成には、自己中心性の克服の問題があることを見落としてはならないのである。

近代的な市民社会における責任感とは、自由な選択、自由な意志の共有ということが前提になっていく。個々の社会的役割は、自由と人権の尊重のなかでの社会的自立ということ育てていく。

人間的に生きていくことは、愛する人のため、家族のために、周りの友人や地域のため、そして、社会のために役にたっていることを実感できることである。その実感は、大きな生き甲斐になっていく。社会的存在である人間は、相手のことを理解し、尊重することで自己の社会的役割を実感できて、社会的に生きる喜びをもってきたのである。

ここでは、自己の価値を社会のなかで理解し、その喜びを感じていく社会的な自尊感情が育ってきたのである。周りから感謝され、社会的に評価されているということが、自分

のもてる力を十分に発揮することができる。十分な力を発揮できることは、人生が楽しく、価値ある人生を過ごせるのである。責任を果たしていくことは人間的な喜びになっていく。

社会との関係で自分が役にたっていることを日常的に感じていくことは、仕事をとおしての場合が極めて大きい。人間のもっている社会的存在は、労働、仕事（家事や地域を含めて）をとおして、それぞれの社会的役割が自覚されていく。人間的に生きたいという願いは、誰かの役にたちたいということであり、その遂行による感謝の反応は、人間的な喜びであり、対人関係での人間的な信頼関係の形成でもある。

青年期は人の役にたちたいという人間的な願望を具体的に仕事への夢をとおして探求していく時期でもある。近代社会は、市場の発展のなかで、社会的役割の自覚が、職業をとおして、雇用という形態であらわれることが拡大してきた。

雇用の働き方は、給料をたくさん得たいという個人の生活欲望の側面が大きくなる。また、分業の発展により、仕事の細分化や専門化の固定、仕事の自己領域の絶対化と閉鎖性が社会的役割の自覚を遠ざけていく。本来の社会的役割からの生き甲斐、人の役にたちたいという人間的な側面が隠れていく。仕事の細分化は、排他性と優越感が支配しがちである。専門性による個々の狭い城づくりが行われていく。

排他性と優越感は、妄想的に自己の絶対的な自信へと転化していく。そこでは、社会的な役割発揮、社会的な創造性、社会的な尊敬ということから乖離していく。社会的にみれば根拠のない自信が専門性の名のもとに蔓延していくのである。そこでは、閉鎖的な社会のなかで、専門性という権威主義が支配していく。この閉鎖的な思考方法の専門主義が、社会的地位と社会的権力と融合すると、人々に対して測り知れない害毒をまき散らし、非合理的な社会関係をつくりだしていく。

ところで、弱肉強食の市場発展は、競争による能力主義的な格差による差別意識が仕事のなかに入り込んでいく。仕事の目的が金銭欲、社会的な地位獲得、権力獲得へと狂奔する。ここでは、仕事が自己欲の実現のためであると、錯覚にはまり込んでいく場合もある。人のために役にたちたい、基本的な信頼関係の増幅という人間的な感情をもつ責任観から、競争に打ち勝つための差別的な能力主義による知的な自己中心性による無責任観になっていくのである。

人のために役にたつために、自己の仕事を位置づけていく教育の意義は大切なことである。子どもの協同的關係を発達させていくうえでの社会的な阻害要因は、金銭欲実現、地位獲得、権力獲得、権威主義獲得の狂奔である。それは、責任性から大きく乖離していく。ここでは、責任逃れ、責任を果たさないことへのいいわけ、自己弁護のための防衛論理などが横行する。まさに、嘘と詭弁の世界へと引きずりこまれていくのである。この世界は、人間としての基本的な信頼関係が崩壊していくのである。

（４）信念倫理と責任倫理の問題所在

マックス・ウェバーは、倫理の問題を「信念倫理的」方向と「責任倫理的」方向と、二つの根本的に異なった倫理を提起する。この二つは、調停しがたい対立する次元であることを述べている。信念倫理の行為と責任倫理の行為の違いを明確にする必要がある。信念理念は、不動の確信で責任は行為者になるのではなく、社会にあり、他の人々の愚かさに

あるとする。責任倫理は、予測可能な限り、自分の行為結果を他人に責任転嫁することは出来ない。自分の行為を予知しうる結果について責任をもっている。信念倫理の人が責任を感じるのは、純粋な信念の炎、不正に対する抗議の炎という信念の炎を持っていないことである。起こりうる結果から判断すれば、全く非合理的なもので、戒めとしての価値しか持ち得ない。結果に対する責任ではなく魂の救済を求めることが信条倫理である。⁽⁷⁾

責任倫理の行為は、予知しうる結果を大切にしていけることが要求されていくのである。責任倫理は他に対する約束、起こりうる結果に対する責任感であり、結果を重要視しない信念的な倫理とは本質的に異なっている。信念的な倫理は、結果としての無責任な傾向に走りやすいのである。結果の責任は、信念に反する他人に向けられる。このような立場は、現実に向ける社会的約束の責任が軽視されていくのである。

信念的な倫理と責任倫理は、現象的に相矛盾していき、本質的に対立していくものではなく、現実社会から遊離した信念は、政治的な空想的な信念であり、宗教的な色彩を強くもっていく。政治的なイデオロギーや価値観の形成は、現実的な社会との関係でつくられていくものであり、社会的な信念は決して責任と無関係なものではない。宗教的な信念は、この限りではない。ウェバーの信念倫理と責任倫理の区別は、宗教的な倫理と政治的な責任倫理とを強く意識したものである。

個々の心情や信念は、人間が生きていくうえで大切なことである。そのことが社会との関係で、個々が社会的責任を果たしていく。このことが、自分にとって価値ある行為として楽しく人間的に生きていく喜びに繋がっていくものである。責任倫理を遂行していくには、社会的に約束した相手への理解、尊敬に対する強い信念が必要である。それは、心情的な、信仰的な精神の内面に重点をおくものではなく、対人関係、社会的な関係における信念である。

結果責任を重視していくことは、責任倫理にとって強く求められていくが、同時に、その結果責任と密接に結びつきの説明責任が必要とされる。自己の意図したようにいかないことは、つきまとう。約束したことでもどんなに努力しても見通しのあまきから結果が極めて不十分のことは多々ある。計画通り実際はいかない場合が多いのである。

どんなに努力しても結果責任は問われる。結果責任が厳しく問われていくことは確実にできることのみ責任しか果たそうとせず、受益者が真に求めている課題から遠ざかっていく。前例しか責任を果たそうとしない姿勢であり、約束にマニュアルが重視されるのである。また、約束を果たすようにマニュアル管理が組織のなかで起きていく。

受益者や社会が真に望んでいることに対する受益者中心の社会的責任感の欠如が起きていくのである。そこでは、新しい困難な創造的である未知の世界に挑戦しなくなる傾向が生まれていく。無難な道、結果責任を追求されない道を選ぶ。結果責任は、説明責任というなかで率直に問題をオープンにしていくことである。努力してもできなかったことへの誠意をもって説明していくことが求められている。

結果には当然ながら説明によって、その内容が理解されていく。約束した内容と結果の内容が具体的に明らかになり、その仕事の過程を約束した相手と約束を果たす責任者との双方が納得しうるかどうかの問題が起きてくる。それは、双方の信頼関係の深まりでもある。この信頼関係が崩壊していくことは、結果責任に伴う説明責任が行われていないことになる。説明責任は、相手が理解していかなければならない問題でもあり、その過程のな

かには、双方の学習作用も含まれてくる。

結果責任に、当事者や社会がどの程度に理解していくのか。このことは説明責任の範囲である。責任感をもって努力しても約束を果たせないことが起きる。このことに、恐れず、困難なことに前向きに向かっていくことが求められている。とくに、広く社会的な責任もっている、原子力発電の事故問題、公害問題、消費者に対して製造物責任が問われることなどは、学習を伴うような説明責任が求められているのである。

原子力発電の事故などは、当初の安全に対する約束の甘さ、見通しの弱さがあったのである。科学的な技術の問題、地域計画の甘さなどがあった。原子力発電の政治に伴ってくる開発問題などは、現実の自然や社会との関係を緻密にみない観念のみの責任感である。被害当事者は救われない。約束を果たせないときには、いい訳がつきまとうものである。想定外の自然災害で起きた事故であったと。

結果責任を果たせないときは、社会的な制裁を受ける。この社会的制裁を避けたいという意識が働き、いい訳がおきる。このいい訳は、自己の防衛本能である。しかし、意識的なさぼりの論理からの当初から結果を意識しないで、責任放棄ということの人を欺くことのいい訳があることを見落としてはならない。

当初から責任を果たさないことを見通して、その場かぎりの逃げの言動や計画書である場合をみることがある。最初から実行する意志がないが、約束の場や説明責任の場で求められることに対するいい訳の説明の計画がある。これは、意識的に人を欺き自己利益のために、相手との約束をそもそもしないものである。この二つの次元の違いを明確にしておくことは大切である。前者は善意の結果としての無責任であり、後者は目的意識的な悪意の責任放棄である。

後者の目的意識的な責任放棄は、約束相手の利他主義を利用してしばしば行われるのである。相手を「信用」させて、相手の利他主義を巧みに利用しての責任放棄であり、当初は、それなりに自分自身は利他主義であるというそぶりを装い、熱心に利他主義的行動をする。これは相手の利他主義を自分に誘いこむ手段である。このように互惠的利他主義の社会的な心理状態を利用しての責任放棄や詐欺行為が意識的に行われていくのである。善意なる互惠的利他主義の精神をもっている人こそ、この罠に入り込んでいくのである。ちょっと世話になっても、善意の利他主義者は、お金を貸すとか、事業資金援助、寄付金などを無理をしてもするが、悪意の利己的な責任放棄者によって、約束不履行、自己欲望のためという詐欺的行為の中にはまり込んでいくのである。

社会的に責任を果たせないことに対する社会的制裁は極めて大切であり、社会的制裁への責任も結果責任は大切なのである。刑事責任もそのひとつである。社会的な法に違反することは強い社会的制裁を受けるのである。しかし、約束を果たさなかった詐欺行為に対する社会的制裁を容易にするには、多くの課題がある。たとえば、刑事告発にしても、裁判に対する経費の問題と長期間の審理、自分自身に対する恥文化や悪意の責任放棄者に対して、強い利他主義をもっている被害者は、相手への思いやりなど、複雑な要因が絡んで告発までに至ることに困難がある。

社会的制裁がなくして、責任倫理の秩序は生まれてこない。責任を果たさないリーダーは、職務をはずすこともひとつの社会的制裁であり、仕事を継続的に放棄して責任を果たさないことは処分することも重要なことである。

責任倫理を貫徹していくには、結果責任が鋭く問われるが、同時に説明責任が伴うものである。また、責任を遂行していくには、関係者、利害当事者との協議が必要であり、公平なる第三者やその役割を果たす機関による評価が必要である。責任を果たしていく過程における透明性と関係者や利害当事者に対する協議責任や評価責任が求められているのである。

これらのことによって、職業をとおしての責任感の醸成が行われていく。働くことは、責任感形成の位置を占めている。青年期の自立の課題として、職業の選択は大きな課題である。職業選択は、自己の役割を社会的に自己評価していくことである。青年期は、生涯の人生をみつめ自己の確立、職業の選択、仕事の能力を形成していく時期である。また、社会や地域との関係で自己をみつめながら、その役割を自覚していく時期でもある。この社会や地域との関係で自己の役割をみつめていくことは社会的な側面からの責任観形成である。責任観の能力形成は、自己の仕事の社会的役割を自覚して、その役割を遂行していく能力の形成でもある。

青年期には、知的自己中心性の克服、アイデンティティの混乱による孤立化、引きこもりという現象が現れる。人間関係の能力やコミュニケーション能力の形成は、青年が社会との関係能力をもっていく基本である。青年期は自己をみつめ、知的な関心を示しながらも自己中心的になっていく傾向を一方ではもつ。知的な自己中心の克服は、青年期の自立の大きな課題である。

青年期は、自己をみつめながら生き方を真剣に考えていく時期である。このなかで価値観の選択、生き方の選択が行われていく。職業の選択は、青年が社会との関係を具体的にもっていく過程でもある。価値観の選択や進路の選択は、自己を社会的にみつめていく過程でもある。

職業選択は、近代社会での自由を獲得していく過程で生まれた。近代社会での職業選択は、自己の社会的役割をみつめる重要な機会になっていく。職業選択の自由は、社会的役割の自己認識過程であり、個々の役割意識からの責任観の形成でもある。職業的な責任観の形成は、職業的な自由の獲得によって生まれたものである。

自由な関係がなくして、責任観は生まれない。責任観とは自発的な心のなかに、人間の実践的な意欲として形成されていくものであり、おしつけられた義務的遂行では決してない。マニュアル人間では責任感形成されないのである。マニュアルどおりの管理された意欲をもたない実践は、責任感による役割遂行ではない。決められたマニュアルで指示された仕事を遂行するだけでは、困難のある創造的な責任の仕事が有効に働かない。自己の仕事の社会的役割を自覚的に理解して、困難のことに対しても創造的に任務を遂行していく工夫のできる能力創造が求められる。

組織が大規模になると、その結果として、分業と官僚化が進んでいく。そこでは、指示待ち人間、マニュアル人間の傾向が生まれていく。個々の仕事が、専門的に個別化していくことによって、そのことが促進されていく。この仕事の遂行のなかでは、自由な創造的な仕事は生まれにくい。そこでは、十分な創造的な、また困難に立ち向かう、想定しなかったことでもやり遂げていく責任観が生まれてこない。

近代民主主義社会の実現の大きな思想的影響を与えたルソーは、社会契約論について、人間の本能に代わって正義を、欲望に代わって権利を、自分の好みに耳を傾ける前に理性

をと、自然状態の人間になかった社会的道徳性の形成を社会状態として強調する。この社会状態こそ、欲望に支配される無制限の自由からの社会的自由であると次のように述べる。

「自然状態から社会状態へのこの移動は、人間のうちにきわめて注目すべき変化をもたらす。というのは、人間の行為において、正義を本能に置きかえ、これまで欠けていた道徳性を人間の行為に与えるからである。そのときにはじめて、義務の呼び声が肉体の衝動に、権利が欲望にとって代わり、そのとき、あでは自分のことしか考えていなかった人間が、以前とは別の原理によって動き、自分の好みに耳を傾けるまえに理性に問い合わせなければならなくなっていることに気づく。この状態において、彼は自然から受けていた多くの利益を失うとしても、その代わりきわめて大きな利益を手に入れる。彼の能力は訓練されて発達し、彼の考えは広がり、彼の感情は気高くなり、彼の魂全体が高められる。このような高所に達するので、もしこの新しい状態の悪用のために、彼が脱出してきたもとの状態以下に墮落するようなことがなければ、彼をもとの状態から永久に引き離し、愚かで視野の狭い動物を知性的存在でありかつ人間たらしめたあの幸福な瞬間を、彼はたえず祝福しなければならないだろう。この得失の総決算を比較しやすい項目で要約してみよう。人間が社会契約によって失うもの、それは彼の自然的自由と、彼の欲望を誘い、しかも彼が手に入れることのできるすべてのものに対する無制限の自由とである。これに対して彼が勝ち得るもの、それは社会的自由と、彼が持っているすべてのものにすべてのものに関する所有権とである」。⁽⁸⁾

人間にとって真に幸福な道は、社会的自由の獲得であり、動物的な欲望の支配する自然状態ではない。人間的に精神が高められていくことは、知性による能力の発達であり、考えの広がりによって、人間的な感情の高まりがされていくのである。人間は社会的存在として、相互の関係をもって扶助されているのであり、人間関係の精神的な高まりや愛情という感情の豊かさが形成されていくのである。ここに人間的な幸福感があるのである。個人的要望のみによって喜びを感じるのは、動物的な次元であり、生理的な存在のみである。

社会的存在の人間は、約束という拘束をもっている。この社会的約束について、ルソーは社会的契約論で次のように述べる。「われわれを社会全体に結びつけている約束が拘束力をもつのは、その約束が相互的であるからであるからにはほかならない。そこで、この約束は、人がそれを果たすとして他人のために働けば、それが同時に自分のために働くことにもなる、といった性質のものである」。⁽⁹⁾

近代によって獲得された自由な社会的な契約ということで、国家や地方自治体、職場との関係で人々は責任を受ける権利と自らの責任を果たしていく義務をもたされていく。国家や地方自治体と企業と、自由に契約をもって、約束を果たしていくのである。市民社会のルールとして自由に契約を結んでいくということは、その約束を履行していく責任が伴って行く。

選挙で公約したマニフェストの実現、各自治体の総合計画や基本施策の実現、各企業の経営理念や経営計画の実行など社会的に市民との契約行為としてだされたものである。国民は選挙という手段、公聴会や政策の意志決定の市民参加などの協議しての合意をはかっていく。この民主主義の実現は、構成員の責任意欲を醸成していくうえ大切な過程である。

個々が社会的に責任履行を意欲的にしていくためには、参加民主主義の責任が不可欠なのである。社会的契約を自由な意志によって実現していこうとする責任意識になっていくのである。

国家や自治体は、法をつくり、市民のルールをつくっていく。社会的契約は、市民のルールとしての法に規制されての社会的秩序を守るのである。ルールなき責任ある行動規範はないのである。近代の市民社会では、自由の確立と共に、責任の履行を求めた。責任なくして、市民社会での自由は存在しない。責任を果たしていかないことは、社会的な意味で個々が自由になっていくことにはならないのである。

1. 青年期と責任感形成

(1) 青年期の責任観の形成と知的自己中心性からの解放

責任なき「自由」な振る舞いは、近代社会の市民のルールを逸脱している独裁者であったりする。そこでは、自己の欲望のみに行動規範をもつ。唯我独尊の絶対者として自分以外の人を見下し、ときには暴力や脅しをもって自分の欲望をとおしていく支配者であったりする。その支配者は、欲望に生きる個人的空想世界に埋没する仮想的な支配者であったりする。そこには、人との関係で基本的な信頼関係の構築という意識はなく、自己欲望、金銭欲や立身出世による支配欲をいかにして実現していくという精神構造が支配するのである。他人との関係は自己の欲望の実現の道具となるのである。他人は見下しの対象であるが、人を操ることは巧みであり、対人関係の技術が主要な関心になっていく。

青年期は、抽象的な思考を身につけていくことによって、知的な自己中心性をもつようになる。そこでは、夢想的な自己展開をしがちになる。青年期にとって、現実を自己の知的な体系のなかで理解することは大切な課題である。この課題を達成することによって、青年は、社会的な責任性を身につけていく。

ピアジェは、青年期の精神発達論で知的自己中心性の克服問題を強調している。この克服課題は、青年期の抽象的、体系的思考から感情と思考の調整能力の発達があるのである。ピアジェの発達論は、乳児期、幼児期、児童期、青年期の年齢の段階によって、知能の発達を分析している。それらは、感覚運動段階、前操作段階、具体的操作段階、抽象的な概念操作段階を明らかにしたものであるが、青年期は抽象的な能力を発展させていく時期であり、思考と感情を高次の均衡を保っていく能力を形成であるとしている。児童期においても感情と思考の発達はみられているが、具体的操作をとおしての思考の発展であり、思考と感情の均衡は、直接的な操作によって均衡が保たれていく。青年期は抽象的な高次の次元で思考と感情を調整していくことが大きな課題になっていく。このことについて、次のようにのべている。

「青年期特有の征服は、外見とは逆に、思考と感情に対して、第二児童期の均衡よりも高次の均衡を確保する。事実、均衡能力を十倍にしている。すなわち、思考も感情も、最初は、均衡能力をさまたげるが、次に、この能力を確実なものとする」。⁽¹⁰⁾

青年期は体系的に思考していくことを身につける。児童期の思考は、具体的で、体験的

であるが、体系的にものごとをみていく意識は、十分に育っていない。青年は、抽象的思考ができることによって、具体的に日常的なこと、非現実的なことに興味を示すことが出来るようになる。青年自身は思考を体系化し、抽象的思考をすることによって、日常的に具体的なことではないことでも興味を見出していく。

「青年は、子どもにくらべると、体系と「理論」をつくりあげる個人である。子どもは、体系をつくらない。子どもは体系について無意識だ。いや前意識的だ。というのも、子どもは、体系を定式化することができず、また定式化しないからだ。子どもは、体系を決して「反省」せず、外部からの観察だけが、その体系をとり出すことができるのである。言いかえれば、問題が現実から課せられる限り、子どもは問題ごとに具体的に考える。そして、原理がひきだされる一般理論の手段に、その解決をむすびつけることはしないのだ。反対に青年で注目すべきことは、日常的現実とは無関係な非現実的問題に対して、興味をもつということだ。とくにおどろくべきことは、抽象的な理論を容易に仕上げるということだ。……一般的観念と抽象的思考による新しい思考の出現は、じっさいには、第二児童期固有の具体的思考から出発して、外見ほど唐突ではない、かなり連続的な仕方でおこなわれる。じっさい、一二歳ごろを決定的な曲り角として、位置づけなければならない」。(11)

青年は、抽象的な思考をすることによって、具体的なことから離れて思考ができるようになる。このことは、現実から離れての知的自己中心性に入っていき基盤である。幼児の自己中心ではなく、青年は、知的な興味によって具体的操作から離れての抽象的な世界に入りこんでいく自己中心性をもつ。ピアジェは、青年期は幼児期の自己中心性にも匹敵する知的自己中心が存在すると次のように述べている。

「すでに乳児で、次に幼児期に、現れるのをみることができた法則によれば、精神生活の新しい能力はすべて、最初は、世界を自己中心的な同化に合体し、それからあとではじめて、現実への調節で構成される均衡を、見出すのである。だから、自分の身体活動に世界を同化する幼児の自己中心性や、出現しつつある思考に事物を同化する幼児期の自己中心性（シンボルあそびなど）にも匹敵する青年の知的自己中心性が存在する。自己中心性のこの最終形態は、あたかも、体系が現実に従わねばならぬのではなく、世界が体系に従わなければならないかのように、反省に関する万能な信念としてあらわれる。これがすぐれて形而上学的年齢なのだ。自我は、世界を再構成するほど強く、世界に合体するほど大きいのである」。(12)

青年期は自己中心性の最終形態であるが、自己の知的自己中心につくられた体系に世界が従属する精神生活をもつのである。青年期の自我は、体系的に知的自己中心性によって世界を再構成するほど強く現れる。青年は、自分の人格と年長者との人格を平等におくようになる。しかし、青年期の特有性として、年長者を超えようとする生命的なエネルギーをもっている。青年期は自己の体系や生活設計は、誇大妄想と意識的自己中心性で落ちつかない精神構造をもっているとピアジェは次のようにのべる。

「青年は、出現するある人格のおかげで、年長者と平等に、自分を置くが、自分の中にはたらいっている新しい生命によって、年長者とは異なる別のことがらを、感じている。このばあい、自分に義務があるかのように、彼らを超えようとし、世界を変えつつ、彼らを驚かせようとする。だからこそ、青年の体系や生活設計が、健気な感情や利他的計画や神秘

的熱意でみだされていると同時に、誇大妄想狂と意識的自己中心性で落ち着かないのである」。(13)

青年の意識的自己中心性の体系は、理想主義的に情熱をもって、利他の計画をつくっていく一面をもつが、自己欲と支配欲を強くもつ場合は、唯我独尊的絶対者になる。それらは、とかく誇大妄想になりやすく、大人の社会に受け入れがたいことで、精神的に落ち着かないのである。この誇大妄想や大人の社会に受け入れられるようにしていくには、どのような克服すべき課題があるのか。青年の意識的自己中心性をどのようにして脱皮していくのか。

青年のもっている情熱的な利他による理想主義による未来志向性をどのようにして、大人も共鳴できる現実の改革エネルギーに転化していくのか。社会を理想的に改造していく青年の役割にもなっていく。大きな歴史の変動期には、青年のエネルギーは大きな役割を果たし、現実的に歴史を動かしていく担い手になっていく場合も少なくない。

青年のエネルギーが歴史を動かしていくのは、歴史の大きな流れに青年の未来志向性、青年のもつ意識的自己中心性が、大人の社会に共鳴したからである。歴史の流れをつかむことは社会科学的、人文科学的な知識による体系化が必要である。意識的自己中心性は科学的な思考によって、現実を分析していく能力を身につけていくことが必要である。そして、その行動の社会的役割が明らかになっていくのである。

社会科学的、人文科学、自然科学を学ぶことが、意識的自己中心性を歴史の流れとの関係で社会、自然、人間自身をみつめていくことができるのである。その意識的自己中心性の体系が、社会的な目的意識性へと転化していくのである。

青年の理想主義と利他主義による正義観の形成は青年期の自立的発達にとって大切な要素である。この発達課題は、青年の教養を豊かにしていくことと結びついている。

大人社会に対する青年の社会的な目的意識性の思考や行動の共鳴は、教養を豊かにしていくことによって、その基盤がつくられていく。さらに、青年自身のもっている利他主義に基づく正義観の形成は、大人社会の現実をみていく関係が必要である。この関係をつくりあげていくことは仕事や様々な社会的な活動によってである。具体的に地域生活への貢献をしていくことで、青年の社会的な関係が作られていく。青年期において、仕事の準備活動やボランティア活動は大人社会との共鳴を導き出し、知的な自己中心性を克服していくうえで大切な課題である。

青年はたえず社会について考えをめぐらし、その討論を行うのが特性であるとピアジェは次のように語る。

「青年は、たえず、社会について、考えをめぐらしているからだ。だが、青年が関心をむけている社会は、改革しようとする社会であり、青年が非難する現実社会に対しては、軽蔑や無関心しかないのだ。その上、青年の社交性は、しばしば、最初から、青年たちの相互の生活によって、確かなものとなる。……青年の社会は、討論の社会だ。すなわち、親密な二人の仲で、または小クラブの中で、世界が、共通に再構成される。とくに、現実世界に戦いをいどむために、限りなく、討論にふける。時にはまた、めいめいの解決について相互批判がおこなわれるが、改革が絶対に必要という点で一致が見出される」。(14)

青年は、現実社会を改革しようと討論する。社会についての改革しようと理想を討論する。青年自身の相互関係による未来への価値の共有は改革それ自身を容易に確かなものに

していくが、しかし、知的自己中心性を特徴とすることから内容や方法について討論にふける。そこでは、相互の批判が行われる。

青年自身の相互の連帯心や大人との共鳴は、討論のなかで大切な課題である。知的な自己中心性の強固性は、それを阻害していく。知的な自己中心は、幅の広い教養を身につけていくことによって、視野を広げていく。視野の広がりや、知的自己中心からの克服によって、大切なことである。知的自己中心性は、狭い専門主義によって一層に拍車をかけていく。さらに、社会的経験の乏しさが知的な自己中心性が増幅されていく。児童期に十分に仲間集団の形成がされずに、また、偏差値教育などによって自己の将来に不安と自己中心性的な利己主義を強制されて育った青年は、青年本来のもっている利他主義的な理想社会への変革が十分に発動しない。

ピアジェは青年の自己中心性による夢想からの現実的な社会の対応の立ち直りは、社会での経験によって順応していくとする。それは、具体的な場面の遭遇が青年の無法の不均衡を是正するとする。

「青年が、改革者から実現者になるとき、社会への真の順応が、自動的におこなわれる。経験が、形式的思考をものごとの現実に妥協させるのと同様に、続けられている可能的な作業が、きわめて明確な具体的場面の中で企てられるときから、すべての夢想から立ち直る。だから、青年たちの中でもよい青年たちの無法や不均衡は心配する必要はない。専門的な学習が必ずしも十分でないにしても、順応の最後の危機を一度克服すると、商業的仕事が、たしかに、均衡を回復し、こうして、はっきりと、おとなの年齢への接近をしめすこととなる」。⁽¹⁵⁾

青年たちの夢想も青年自身のもっている知的自己中心性の特徴であり、明確な社会との関わりでの具体的場面で均衡が作りだされていく。青年期は社会的順応の大きな危機を作りだしていくが、社会的体験をとおして、現実に妥協していくのである。具体的場面も継続されている作業が大人に引き上げていくのである。青年期は、科学的志向や科学的知識の蓄積によつての総合的な人間として生きていける総合的な体系の知的意識性と幅の広い教養性が必要になっている。また、同時に、社会的な体験や継続的な作業、仕事に対応できる能力形成が求められる。さらに、最も重要なことは、就業の確保である。青年期での就業の不安の解消は、具体的な就労ということばかりではなく、知的自己中心性の克服も大きな課題であることを見落としてはならない。

(2) 青年期の仲間集団形成と責任感形成

教育社会学のハビガーストは、青年期の発達課題として仲間集団の形成をあげているが、この仲間集団の強い絆の形成は、教師や両親などの大人の権威を主張する人々としばしば衝突するとする。ハビガーストの青年期の発達課題は中等教育の13歳頃から18歳頃までの年齢時期を対象にしている。青年期の発達課題として、社交的な仲間集団の強い絆の発達課題、情緒的、知的、経済的に独立していく発達課題、人生観の発達課題と、ハビガーストは三つをあげている。青年期の仲間集団の形成は、仲間の慣習に強く盲従していく性格をもっているとして、社会との関係での独自の発達課題における教育の重要性を次のように指摘している。

「青年時代を通じて、青年の行動に最も強い影響をあたえるものは、仲間から認められるかどうか、という問題である。一般に青年は仲間の慣習に対して盲従するものである。彼は仲間がきているような服を着、同じような髪型をし、そして同じような俗語を用いなければ気がすまない。しかし、この盲従は表面に現れている生活に限られているようである。青年期の社交的な発達という課題は、中等学校を通じて大学に至るまで行われる。大学の後期ごろになると、学生はもはや彼らの注意の焦点をそれにおかなくてもよいほどに、この課題を達成しているものである。……この課題の達成に成功すれば、一生を通じて社会に合理的によく適応することができ、むだなまわり道をしないで、青年期の他の発達課題をなしとげることができる。もしこの課題に失敗すれば、そののち不幸な生活を送ることになる。すなわち結婚が困難になり、不可能になり、不幸になるばかりではなくて、彼は他人といっしょに働くことを学ぶことにも失敗するであろう。そして彼のその後の対人関係においては、子供のように他人に依存するか、それとも、ひとりよがりの優越感のなかにとじこもるか、どちらかである」。(16)

青年期の仲間集団の強い絆の盲従性は、表面的な生活形態のなかで現れるのであり、社会との関係を独自に教育していく課題があるのである。この課題を達成していくために社交的な発達が大切であるとハビガーストは問題提起する。この課題を達成すれば一生を通して合理的に社会に適応していくとする。

失敗すれば生涯において、人間関係において子どものように他人に依存するか、または、ひとりよがりの我が儘な人間として優越感の殻のなかに閉じこもるとしている。この社交的な発達は、広い意味での社会的役割の自覚のもてる仕事とおしての人間関係の発達が大切である。決して、人との付き合い方の生活技術的な意味では、人間の社会的存在の基本になっている労働や社会組織、地域の関係があいまいにされていく。

教育において、目的意識的に仲間集団の形成の役割を社会的関係のなかで育てていくためには、異年齢集団との仲間意識の形成が大切である。学校教育において日常的な学級生活の中だけでは、仲間集団の強い絆の盲従性があり、社会からかけ離れての閉鎖的な歪な関係が作られていく。

ハビガーストの、社交的な発達課題は、社会階層によって異なっていくことを強調している。アメリカの上流階級や中流階級は、青年期に社会的に成功することを重んじている。20歳前後までに社交生活を十分に発達させているとハビガーストはみている。上流階級は、結婚によって青年期の社交生活が終わりをつげる傾向をもつとしている。

下層階級は、異性との社交上の経験は、ほとんど常に性的経験をともなう。結婚は早期に行われる傾向をもち、青年期の社交生活は早く終わってしまう。下層階級の社交グループは、しばしば窃盗や性的不道徳が行われる。同じ仲間と新しい交際をはじめるという課題は、下層階級は簡単に果たされる。組織とか団体などの社交上の高度な技能も下層階級は必要がないとハビガーストはみる。

「この課題を首尾よく成就することは、将来の社会的地位の向上を希望する下層階級の青年にとって、特に重要なことである。社会的に向上するには、経済上の技能と同様に社交上の技能によらなければならない。下層階級の青年にとって、中流階級の作法やパーティでの振舞いや社交上の態度などは、学校以外の場所ではめったに学ぶことができない。もし学校が青年男女を助けて、社会的地位を向上させるようにはかろうとするならば、学校

は、彼らに社交上の技能を学ぶ機会をあたえなければならない。中等学校や大学は、このことのためにクラブ・集会・自治会・運動・音楽・美術などといったような、学究的でもなければ、形式的でもない活動を通じて、大いに活躍しなければならない」。(17)

下層階級の独自の教育の必要性をハビガーストはアメリカ社会の現状から強調しているのである。中流階級の作法やパーティの振る舞いを学校教育以外の場では学ぶことができないので、学校は下層階級の青年たちに社交上の技能を学ぶ必要があるというのである。下層階級の社会的地位向上には不可欠な要素であると。青年たちが自分のやりたい趣味を伸ばし、仲間と共に活動の達成感や喜びを感じ合い、そのことを通して自治的活動の発達になるようなクラブ、集会、音楽、美術などのサークル活動は大切である。そのことをとおして人間関係を学ぶことは、仲間集団の形成で不可欠である。

学校教育として十分に青年期の仲間集団の一員になれる発達課題の保障が求められている。それは単なる社交的な生活技能ではなく、青年たちの社会との関係をもつての自治的形成能力であり、国民としての、地域の住民としての主権者として統治能力の形成であり、社会的責任を個々の役割から形成していく能力にもなることである。この社会的責任を果たしていく統治能力は、幅の広い教養性に裏付けられた教育が必要であり、教養性によって、それぞれの立場や価値観を認め合う度量の広さが身についていくものである。寛容なる精神の形成も幅の広い教養性が不可欠なのである。

(3) 青年期の社会的自立の教養性と責任感形成

青年期の社会的自立の課題にとって幅の広い教養性が必要である。青年期の特徴として、知的な自己中心性があり、それが分業化や専門性と結びつくことによって、一層に社会から隔離されて、排他性をもって自己を絶対化していく優越感がつくられていく。ここには根拠のない自信がつけられ、根拠のない権威主義と他人を蔑視していく考え方が支配していく。排他性が強くなればなるほど、個人間の能力主義的な競争主義が激しくなればなればほど、根拠のない自信が横行していく。相手を理解し、尊重していくということの意識から遠ざかり、自己を絶対的に過信して、内に閉じこもっていくのである。自己は内的になり、外部との社会的な世界を断ち切るのである。青年期にとって、職業選択は、社会的自立の大きな位置を占めている。このなかで、教養性は、特別に重要性をもっている。現代の就職は、分業化のなかでの職業選択である。

ところで、青年期の独立性の発達課題は六つあるとハビガーストはみる。第1に、自分の身体の構造を理解し、身体を大切にすること。第2に、両親や他の大人から情緒的に独立すること。第3に、経済的な独立について自信をもつこと。第4に、職業を選択し準備すること。第5に、結婚と家庭生活の準備をすること。第6に、市民として必要な知識と態度を発達させること。

第一の身体を大切にすることについて、自分自身の体に誇りをもち、満足することからはじめなければならない。青年期は身体の発達に強い興味をもち、同年齢の仲間と比較する。自分の身体の成長に悩む。学校は身体の発達に相談できる体制をつくることが求められる。

第二の両親や他の大人から情緒的に独立することの課題は、両親への愛情を発達させる

ことと、他の大人に対する尊敬の念を発達させる必要がある。「青年期の男女は両親が権威をふりまわすときは、それに対してしばしば反抗し、両親が彼らに対し、責任ある成人であるよう欲するときだけは、従順な子どもとなる。両親に対する反抗は、ときには教師に対する反抗へと変わっていく。実際には両親へむけられるはずの反抗心が、しばしば中等学校と大学の教師にむけられる。特に、両親が非常に厳格であり、命令的であって、子どもを自由にさせないときには、青年男女は家庭ではほとんどあらわすことができない独立心を主張する場所として、学校を利用しがちである。したがって教師は、しばしば心理的な離乳の過程において重要な役目をうけもつものである。魅力のある女教師は、母親から離れ、そしてまだ同じ世代の女子に愛情を感じない男子にとって愛慕の対象となり、若い男性の教師は女子にとって同様に愛慕の対象となる。この課題に失敗して成人になったものは、情緒的にはまだ子供にとどまっているので、人々に依存し、ときにはまだ両親に依存して、重要な事柄について自分で決断することも、世の中を自由に動きまわることもできない」。(18)

厳格に育った家庭では両親に愛慕をもつことができるので、学校で、教師を愛慕の対象にすることがあるとハビガーストはのべている。子どもによっては、教師は離乳の過程において重要な役割を果たす場合がある。情緒的に子どものままでは、重要な事柄の自己決定をすることができないとする。

自己決定できることは、一人前になる能力をもつことに自信をもつことで、その役割の大切さを次のように指摘する。

「必要であれば自立して生計を立てることができるという自信をもつこと。これはわれわれの社会では、男子にとって根本的な課題であり、女子にとっても次第に大切な課題となってきた。……われわれの社会においては、青年時代には一人前になりたいという願望とその達成との間に、どうすることもできないずれがあり、そして青年期の男女が少しでも一人前になる能力に自信をもたないかぎり、彼らは無力な不安定な状態に置かれる」。(19)

能力に応じた職業を選択し、その職業のための準備をすることは青年期の発達課題の大きな目標である。中等学校や大学の学校教育において職業課程を受けた青年は、仕事に順応しやすく、よい成績をあげることができる。このことに、ハビガーストは次のように述べる。

「職業課程をとって就職した学生のほうが職業課程をとらないで就職した学生よりの、いっそうよく仕事に順応し、よい成績を残しているのを発見した。これはいろいろの職業の基礎となる事柄を教えるような職業教育が有益なものであることを示している。たとえば、道具や材料や仕事の仕方について全般的に習熟することは、労働的な仕事に進もうとする男子にとってよい準備である。事務上の手続きや書記の活動について習熟することは、事務的な仕事のためにはよい準備である。……一定の職業が必要とする技術とか、あるいは労働者の数とかは急速に変化する。その結果、昔の徒弟制度はごくわずかの専門職をのぞいては不適當である。産業または教育機関は非常に多くの労働者を養成しなければならない。職業を変えることは、かなり頻繁に行われる。普通の青年にとって、適当な職業があればこれやってみたあとで見つかるものである」。(20)

学生への科学的な職業指導が青年期の課題として、学校教育に求められているのである。

青年は、様々な職業体験をとおして自己の職業適性を見いだしていく。学校教育としても職業の基礎となる道具や材料の扱いなどの技術的諸能力を教えることが大切になっている。全般的に習熟できる職業の基礎的な諸能力をどのようにして身につけさせていくかという学校教育の課題がある。

青年期の教育課題として、結婚と家庭生活の準備をすること。家庭生活や子供をもつことに対して建設態度を養うことは、青年期の教育の大切な課題である。大学教育としても結婚と家庭に関する科目の必要性をハビガーストは強調する。「性や求愛の問題についての確な助言を与える。大学や高等学校は、若い人々に男女交際の問題や結婚の準備について、個人的な指導の機会をあたえなければならない。大学は結婚と家庭に関する科目を設ける。これらの科目に人気があるのは、これらが必要であることを示している」。⁽²¹⁾

市民として必要な知識と態度を発達させることは、民主主義の社会を形成していくうえで不可欠なことである。民主主義の概念を形成していくことは、法律、政治学、経済学、地理学、人間性、倫理など複雑な社会制度を理解していくうえで様々な社会科学的、人文的、自然科学的な知識を身につけていくことが求められている。ハビガーストは複雑な概念を理解していくうえで、直接的、具体的な体験が必要であるとしている。

「概念は、直接経験や、読書その他の間接経験から形成させる。概念をつくる能力の低い人々は、直接的・具体的な経験によらなければ概念をつくることができない。代数のような抽象性をもつ科目は、おそらく青年男女の半数のものにとって理解しがたいものである。一方すべての人々は、民主主義や正義や自由のような抽象的な概念に対して、自分なりの考えをもつことができるし、また実際もっている。児童期や青年期の生活体験を通じて、これらの概念に対する基礎が与えられる。強い興味と動機づけが、個人の学習能力をたかめることは疑うまでもない。人は自分が興味をもっている事柄にいっそう注意をはらい、よりよく記憶するのである。このように興味と動機づけは非常に差異があることが、知的発達における個人差のいま一つの原因となっている。……学生が重要な概念を形作ることができるような基本的な経験をあたえること。たとえば、学生の自治活動、共同社会や地域社会の研究、野外旅行、一地方の市民の計画に参加することなどの経験がそれである」。⁽²²⁾

市民としての民主主義的な人格形成にとって、自分なりの考えをもつことや市民として人間関係を正しくもつことは大きな課題である。青年の学習過程としての市民的民主主義の人格の形成が求められている。ここでは立場の異なる、価値観の異なる人々が自由に討論して、互いに認め合う寛容の精神をたてることが民主主義的人格の形成にとって不可欠である。とくに少数意見の尊重は、未来志向的に物事をみていくうえで大切な視点である。現在は少数意見であっても未来においては支配的な貴重な見方になることがある。未来志向的な改革者は、当初は少数意見である。改革者であることは現在において、支配的な多数意見ではないのである。学習は未来を作りあげていくのである。少数意見を尊重していく民主主義的な討論の場を学習の側面からも大切なのである。

2, 青年期の発達課題としての社会関係と人生観形成

(1) 青年期の人生観形成と社会的責任観

青年期の発達課題を社会との関係で、人生観をつくりあげていくことは大切なことである。ハビガーストは、青年期の最後の仕上げをして社会との関係での人生観の発達をあげている。市民としての正しい価値判断の力や道徳的態度を養うことは人生観の発達にとって重要な課題である。

青年期の人生観の発達課題として、社会的に責任のある行動を求め、そしてそれをなしとげることと、行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶという二つの課題があるとハビガーストは考えている。責任を遂行することと、価値や倫理の体系を学ぶことは、人生観の発達の課題である。

地域社会や国家に責任を果たしうる成人として社会参加することは人間的成長にとって大きな意義がある。個人的行動についても、その社会的な価値を考慮していくことをハビガーストは社会的責任として強調する。儀式や祭礼の行事は、個人が社会集団と結びつけられるのに非常に役にたつということである。儀式は感情に訴えていろいろと異なった知的能力をもっている人々をいっしょに結びつける役割をはたすというのである。

多くの青年後期は愛他的であるということに認められたいと願っているとハビガーストはみる。青年は社会の義務を受けたい。青年後期は地域社会集団の利益という観点から物事を考えはじめている。青年たちの自立的行動は、地域の運動チームの活躍、協同組合や友愛組合の参加、子どもの面倒をみること、地域の合唱で歌ったりすることであると。青年の人生観の発達課題で地域の活動は、重要な役割を果たすのである。これらの地域活動は、青年が人生のなかでもっとも自立的に活動することなのである。青年期に十分に地域活動を与えられていない場合は、どのような問題が起きていくのであろうか。かれらにとって、社会や地域との関係で、人生のなかでもっとも自立的に行動する機会が奪われていくことになる。青年期に愛他的な精神が大きく育っていく。それを十分に発達させる場が保障されないことは、生涯での自立の精神に大きな問題を作る。

青年期には、地域社会を研究する歴史や地理、商業・工業・政治の学校教育の大切さハビガーストは述べる。また、地域社会での奉仕の活動を学校教育の計画に位置づけていく必要性を指摘している。合衆国の地域社会は少年少女に郷土に対する愛着心を発達させる援助として、地域の作家によって創作された物語を大切にしている。ハビガーストは郷土教育の大切さを社会的責任のある行動の教育のなかで位置づけている。⁽²³⁾

行動指針となるための価値や倫理の体系を学ぶことは、青年期の人生観形成の重要な位置であるが、価値がつくられていく源泉で母親の愛は一生を通じてほとんどかわりないとハビガーストは次のようにみている。

「価値は、このような最初母親の愛や注意を引こうとすることからつくられていくが、これは一生を通じてほとんど変わらない。人間は母親に愛され、認められたいと願うだけではなくて、父親・教師、他の大人たち、同年齢の仲間、あるいは自分よりも少し年上のものなどから愛され、認められたいと願う。彼は、それらの人々から愛され認められるような事柄に、価値を認めるようになる」。⁽²⁴⁾

人は愛され、価値を認められるになることによって、自分の考えに自信を深めていくことになり、生き甲斐も感じていくことになる。愛され、認められていくことによって、価値の同一化が行われていく。最初は母親であるが、生涯をとおして人は同一化の過程を経て、生き甲斐を感じていくのである。青年期は、尊敬する周りの人、共感する人々の価値観に同一化していくことが大きい。もっとも価値の同一化が大きく現れるのが青年期の特徴であることを発達論の面からも重視しなければならない。人間は生涯を通して価値の同一化が行われていくことをハビガーストは次のように述べる。

「人間は生涯を通じて、自分自身をいろいろの程度でいろいろの人々と同一化する。重要な最初の同一化は母親に対して行われ、つぎには父親に対して行われる。子供が自分を両親と同一であると感じていることを示す証拠はたくさんある。彼は自分が親であるように想像し、そしてあたかも自分が親であるかのように振舞う。この親に対する同一化が良心の基礎をつくる。何が正しく、何が正しくないかをわれわれに知らせる「心の声」は、根本的には両親のほめたりしかったりする声が、子供の同一化によって転化したものである。良心は他の大人たちや同年齢の仲間に対する同一化や、反省的な思考を通じて変化してくる。模倣は同一化の一つの側面である。人間は彼が同一化しようとする人を模倣する」。(25)

何が正しいか。どのようなことをすることが生き甲斐に繋がっていくのか。青年期は人生について悩むことが特徴である。青年は、様々な価値、多くの知識をどん欲に得ようと苦心し、反省的思考を繰り返す。悩むことは青年期の特権である。悩むなかで、尊敬する大人に模倣し、同一化するのである。

(2) 価値の選択と青年期

文明の発達した生活では価値がぶつかりあうことが多くあり、いずれを選択しなければならないことがしばしばある。この価値の選択は複雑性のなかで自分自身の責任で選択しなければならない。このためには、価値を論理的に研究し、分析することが要求されていく。この問題についてハビガーストは、教師や両親が援助できないことが多く、青年自身が自分で判断できる能力を身につけていく必要性を強調する。

「現代の人間や教育は、現代の世界や人間性についての知識と調和している価値体系を発達させ、あるいは発見するという課題に直面している。現今の多くの社会は、道徳的な無秩序の状態にあり、人々は、古い道徳原理を現代の考え方で吟味すると、たちまちそれが崩れてしまうだろうと考えているから、それを分析することを恐れ、その伝統的な道徳原理にためらいながら服従している。それで現代の人間は、天与の道徳律は認めないが、しかし経済的・政治的な諸原則には服従する。現代社会ではその世界観が価値体系から分裂している。だれもがこのために不幸であり、青年は当惑している。青年は、人間性や宇宙についての自分の科学的な知識に応じて、それぞれ自分の目標や希望をうち立てることの課題に、ひとりで直面しているように思われる。教師や両親がそれを援助しなかったり、援助できなかったりすることがあまりにも多い」。(26)

青年期の発達課題の特徴をきちんとつかむことは中等教育や大学教育にとって大切なことである。青年期の発達課題を時代と共に、それぞれの社会や文化の状況、現実の社会的課題の要請に合わせて、また将来の仕事を考えていくうえで、目的意識的に教育実践をし

ていくうえで、カリキュラムをたてていくことは不可欠なことである。

つまり、青年期の発達課題を保障していくカリキュラムを中等教育学校や大学でつくることを求められている。そして、行動する前に反省的思考の場を学校教育のなかで与えていくことが大事である。例えば、運河の計画を問題にするとき、10年、20年さきの経済状態がどうなっているのかの予想を調べながら賛成と反対を考えていく必要があると、ハビガーストは提起する。反省的思考は、計画された行動に対する道徳的結果と物質的結果の両方をあらかじめ考えたり、予見したり、さらには、われわれ民主社会での価値に照らして判断された最もよい結果をもたらすであろうような行動計画を選択したりすることができる。⁽²⁷⁾

青年期の発達課題にとって、ひとりひとりがどの程度に発達課題を達成化しているのか、それに応じての教育上の処方をつくるカリキュラムの個性化をとハビガーストは次のように問題提起する。「現代の学校は、生徒に彼らの発達課題をいろいろ変化した方法で達成していくような機会をあたえるとき、最もよい活動をしているといえるのである。最も素質に恵まれた子供たちでも、彼らの才智をさらにみかくことができるような、興味ある事柄をあたえるように、授業計画を豊富にしたり、また生徒ひとりひとりが自分の速度で自分の特殊な発達課題にむかっていけるように、カリキュラムを個人化したりすることによって、学校はすべての子供たちに対する義務を果たすことができるのである」。⁽²⁸⁾

ところで、経済的に恵まれない家庭の子どもは、特殊な学習要求をもっている。そこでは、特別の教育の援助が必要である。また、大学進学をする子どもと高校卒業後に直ちに就職する子どもたちの学習要求も同じではないし、社会が要求する教育のニーズも同じではない。この問題について、ハビガーストはアメリカの高等学校の教育の現実をみながら次のように述べる。

「都会や、いなかの貧民街に住む下層階級の家庭の子供たちは、学校生活のなかに、社会的に経済的に向上する機会の財源を見いだす。そのためには、彼らになりたいと望んでいる中流階級の社会的技能や言語や態度を学習することを援助してほしい、という特殊な欲求をもつのである。また、彼らは職業の選択やそのために学習科目について、特別な援助を必要とする。高等学校を卒業後、直ちに職業についたり、家庭をもったりする多数の生徒たちに対しては、職業に対する準備や、結婚と家庭生活に対する準備という発達課題の意義は特に著しい。これらの課題について彼らを援助するために、一般に高等学校では職業課程が設けられている。また結婚と家庭生活に対する準備という課題のためには、人間関係とか家庭生活・家族生活といった分野で、多くの科目が教えられるようになってきた」。⁽²⁹⁾

ハビガーストは現実の子どもの進路の問題を見つめた場合に、大学を進学しない生徒に対する職業課程の教育や結婚と家庭生活の教育を大切にしているアメリカの高校教育の多様性を積極的に評価しているのである。大学進学する生徒たちの職業選択は遠い見通しになるので一般教育と職業選択の教育は、両方とも価値をもってくる。大学進学の生徒たちにとって、市民的有能さを導き出す教育と、個人の独立、学問の方法、反省的思考などを高度に発達させるような体験をさせることであるとしている。大学進学においても体験的学習の重要性を強調しているのである。

3. 青年期とアイデンティティの危機

(1) 青年たちの学びの環境と人間的信頼の形成

青年期は、自分の人生について真剣に悩みながらみつめる時期である。身体的にも生理的にも大人への過渡期に入っていく、それに対応して精神的に大きく発展していく。古来から、地域では、年齢階梯制として子ども組や小若組から若者組、若衆宿、娘宿という組織が存在した。これらの地域の組織は、若者たちの大人への人間的な成長に大きな役割を果たした。

これらの地域組織は、人間としての一人前になっていくための地域での年齢階梯的な大人への育ちの組織であった。若者たちは、仕事や地域、家庭、男女交際のことから先輩たちから学んだのである。ここでは、伝統的な地域や自然に対する祭礼行事と結んでの掟が存在して、地域のなかでの自我や自己の役割意識の確立、アイデンティティの形成がされていたのである。

エリクソンは、人間として生まれてきた乳児は、基本的に母親との関係からの信頼によって育っていくと考える。基本的信頼の成熟は人間の成人期の愛情や信頼、信念が直面する重大危機に際して、再び活動するのが一般的であり、基本的信頼と不信の葛藤を解決するための永続的な様式の確立が自我に課せられた最初の仕事としてエリクソンはみるのである。乳児では、母親との関係の質が最も基本になっている。

「母親は、乳児の個々の要求に敏感に応じて世話をし、合わせて、その文化の生活様式の信頼されている枠内で彼女自身一個人として信頼されているという確信に満ちているという特質に裏づけられた育て方で、子どもの心の中に信頼感というものを裏付ける。これが子どもに同一性の観念の基礎を形づくる」。(30)

基本的信頼の感覚は乳児から人間として生まれてきたときから、育てられていくのである。人間として生存していくうえで最も大切な感覚である。この基本的信頼は、本来の自分であるという感覚と、他人が自分に対して期待しているような人間になるという意識の形成を併用している。基本的信頼をつくっている親の信念は、歴史を通じて、文化的、社会制度として保護されてきたものである。エリクソンは、この親の信念を宗教に求めた。

「生まれて間もない乳児の心の中に芽生えてくる信頼を支える親の側の信念は、歴史を通じて、その制度的保護手段を組織された宗教に求めてきた。(時にはそれは最大の敵でもあったが。) 親の世話から生まれた信頼は、実は、その宗教の实在の試金石でもある」。(31)

動物的本能としての種を継続していくための子育てではなく、人間の乳児の子育ては、特別に基本的信頼という精神的な作用が与えられているのである。それは、原始的な宗教から人間に与えられた儀式的な習慣のなかにみいだすことができるのである。青年期のアイデンティティの形成の課題も、人間が本来的にもっている基本的信頼と不安という葛藤の問題があることを見落としてはならないのである。人間は、歴史的な社会的存在である。青年期のアイデンティティの危機は、時代の社会的な状況との関係を大きくもっていく。

(2) 青年期のアイデンティティの危機と歴史の変動

青年期とアイデンティティの危機についてはエリクソンは、第2次大戦とそれ以降のアメリカの現代社会をみながら次のように述べている。

「アイデンティティの危機とはいまや、成長と回復の分化の資源を統合しつつ、発達が何とかなさねばならないときの、必要不可欠の転回点や決定的瞬間を指すものとして、受けとられつつあるのである。このことは多くの状況に適用できる。たとえば、個人の発達やエリートの新たな出現に際しての危機、また、個人の治療や急激な歴史の変動の緊張状態における危機などに、適用可能である」。⁽³²⁾

アイデンティティの危機は、個人の発達の転換点や急激な歴史の変動期においては有効な運用になるというのである。つまり、アイデンティティの危機の概念は、社会的病理の現象の説明ではなく、積極的に成長と回復のための必要な視点であるというのである。

「個人の人生におけるアイデンティティの危機と、歴史発達における現代の危機とを切り離すこともできない。なぜなら、両者は相まって互いに他を定義しあい、真に相互関連的だからである。事実、心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとの間のすべての相互作用は、一種の心理社会的相対性としてのみ概念化されうるものであり、アイデンティティの形成はそのような相互作用にとって原型としての重要性をもっているのである。したがって、重要なことは次のことである。すなわち、交互に演じられるたんなる「役割」や、たんなる自意識過剰な「外観」や、たんなる力の「姿勢」などは、「アイデンティティの探求」と現在呼ばれているものの主要な側面ではあっても、おそらくは、本質ではありえないであろうということだ」。⁽³³⁾

歴史発達における危機と、現代的危機的、及び個人の発達の危機は、相互に関連して存在しているのである。アイデンティティの形成は、原型として相互作用の産物である。発達のものと歴史的なものとは統合した存在である。役割意識、自我意識、自我像、自我評価などは、アイデンティティの形成の一面を含んでいるが本質ではない。エリクソンにとって、アイデンティティを考えるのは、人間の発達を考えることの基本になっている。そこでは、パーソナリティ特性とか、不変な人間像を問題にしているのではない。

青年期はイデオロギーの構造が自我形成において大きな役割を果たす。イデオロギーは、自分の体験、自分が集団に参加するときに、アイデンティティの形成に強く繋がっていくのである。この問題について、エリクソンは次のように指摘する。

「環境のもつイデオロギー構造が自我にとり絶対必要になるのは、まさに青年期においてであると、先に述べた。なぜなら、全世界についてのイデオロギー的単純化がなくては、青年の自我は、自分の経験を、自分の特殊な才能や集団参加の増大に応じて組織化することができないからである。したがって、青年期というのは、個人が、子どもの発達の初期段階よりも、歴史的現在により一層接近している段階である。児童期のアイデンティティは無意識なものであり、変化するとしてもその変化の速度はきわめて遅いが、アイデンティティの問題それ自身は、歴史的時期といっしょに変化してゆく。実際、それは歴史の産物なのだ」。⁽³⁴⁾

児童期のアイデンティティは、イデオロギー的に無意識なものであり、自ら主体的にアイデンティティを変化させていくものではない。アイデンティティは歴史の産物であるが、青年期は自らの経験と自分の特殊な才能などによって主体的に組織化していく。革新的な人間が生まれてくるのは、著しい歴史の変動の時期である。イデオロギーの革新性も歴史

の変革によって生まれてくる。個々の人間の鋭い洞察力や創造性は、困難な状況にぶつかっている社会的状況に立ち向かう精神であり、それは、歴史的な変革期の産物である。日常的に悩んでいることは、洞察力と創造性を作り出していく。革新的人間が生まれてくるのは、文化や文明、技術の歴史の統一体であり、それは、現実の社会に、克服しなければならない課題が現在するなかでの人間の個々の前向きな生き方からである。この問題についてエリクソンは次のように述べる。

「革新的な人間が現れるのは、著しい歴史的変遷の時期においてのみであるとはいえ、文化や文明や技術の歴史は、前述のような歴史的統一体の歴史である。革新的な人間は、十分に恵まれた洞察力をもっていれば、現行の体制に縛られていることはできないし、十分に誠実であったり、または十分に悩んでいけば、日常の複雑な「必要物」の裏に隠された存在のもつ純粋な真理をみないわけにはいかないし、また十分に憐れみの情けが深ければ、無視され続けてきた「貧しき者」を看過することはできない」。⁽³⁵⁾

日常の悩みのなかで、その問題解決のための複雑な必要性が、革新的な人間を作り出す原動力がある。貧しき者の憐れみの情の深さが、変革者になっていくのである。情けという人間的な感情が、そこに裏打ちされているのである。

自我の課題は、人間の存在が時間的に連続的で、形態的に組織されたという三つの連続した過程の一つとして認識することによって可能であるとエリクソンは考える。この三つの過程では、第一に生物学的・生理的な思考様式であり、自らの生活周期を生きる器官体系によって組織体となるものである。第二は社会過程であり、地理的・歴史的・文化的に定義された集団内部に組織されたものである。第三の自我過程は、一つの組織原理であり、各個人はそれによって、自己体験ならびに他者に対する現実性という点で同一性と連続性をもった首尾一貫したパーソナリティとして、自分自身を保持してゆくのである。⁽³⁶⁾

さらにエリクソンは自我の分析は、神経症の克服に自分で作り上げた歴史的必然性を理解でき、自我アイデンティティと一体となったときに自由であると感じると次のように述べる。「自我の分析には、個人の児童期を支配した歴史変動、青年期の危機、成人期の適応行動などに関連した個人の自我アイデンティティの分析が含まれるということだ。なぜなら、個人的な神経症の克服は、かれが、現在の自分を作りあげた歴史的必然性を理解できるようになったときに、始まるからだ。各個人が自由であると感じるのは、かれが自分自身の自我アイデンティティと一体化しうるとき、および、与えられたものをなさねばならぬことに適用する術を学んだときある。かれは、そのようにしてのみ、かれの唯一無二の生活周期と、人類史の特定の段階との偶然の一致から（かれの世代および次の世代のための）自我力を引き出すことができるのである」。⁽³⁷⁾

かれの生活周期と人類史の特定の段階の一致から次の世代の自我力を引き出すことができるとエリクソンは、次世代への人類史的発展のなかでの自我力の役割を述べているのである。

（3）勤勉感の成長とものづくりの青年教育

勤勉感の形成については、児童期から始めなければならないことをエリクソンは強調する。また、それに対応して劣等感の形成も理解していかなければならないと。子どもは自分だ

けの時間を欲して、道具を使い、何かものをつくることに没頭する。それを上手に、完全につくることができるという感覚なしでは満足しないようになる。自分のしていることに何か欠けているという感じにとらわれる。

子どもはものを生産することによって他人から自分の存在を認めてもらうことを知るのである。これらは、社会における生産技術や経済の役割を子どもに理解させていく契機でもある。この時期は自分自身の課題からの疎隔になることも重視しなければならない。不十分しかできなかった葛藤が劣等感に転化していく。社会的な差別は子どもの心に自分を無価値な存在であるということに致命的に悪化させる。

勤勉感が発達する時期に子どもの勤勉能力を発達させるうえで、社会的差別という外的障害、劣等感という内的障害を取り除いていくことは大切なことである。教師は子どもの達成できる課題を強調することが求められる。そして、一つのことを上手にやりとげる楽しみや誇りをもたせることが大切である。また、勤勉には、他人と一緒にすることの理解も必要である。分業や機会の分化についての最初の感覚が、ものづくりに熱中する子ども時代に発達する。⁽³⁸⁾

勤勉感の発達にとって、自由なものづくりの教育が必要である。このものづくりは、子どもの熱中する心を育て行く。それは、進路の問題とも重なり、社会における生産技術や経済の役割を理解させていくことの大切な教育的基盤になっていくものである。しかし、勤勉能力を発達させていくうえで、社会的差別という障害と、劣等感という心の障害を取り除いていく必要があることをエリクソンは強調する。

青年期にとって、社会的差別と劣等感の克服は大きな課題である。とくに、青年期は自分が感じる姿よりも他人の眼が気になっていく。この他人を気にしていくことは、新たな連続性や同一性を探究していくために大きな意味をもっているが、それが、社会的差別や劣等感と結びつくことによって、病的になっていく。この問題についてエリクソンは次のように述べる。

「かれらが、時々病的に、そしてしばしば奇妙なくらいに心を奪われているのは、自分が感じる自分の姿よりは、他人の眼に写った自分の姿であり、また、かつて習得した役割や技能と、その時代の理想像とをいかにして結びつけるかという問題である。かられば、新たな連続性感や同一性感を探究するが、それはいまや、性的に成熟をそのなかに包摂しているものでなければならない。また、それらを探究する際に、何人かの青年は、恒久的な偶像や理想像を最終的なアイデンティティの保護者として設定する前に、かつてのもろもろの危険をもう一度しっかりと支配しなければならない。・・・・青年は明らかに、信頼しうる人間や観念をきわめて熱烈に求めることであろう。その人間や観念とは、その面前で自分が信頼に値する者であると証明することが価値あると考えられるようなものを、同時に意味している」。⁽³⁹⁾

青年期は自己同一性を形成していくうえで、他の眼を気にするばかりではなく、信頼しうる人間と、理想とする観念や価値を追い求める。この信頼しうる人間と、理想とする観念や価値は、面前で証明できるならば、それを積極的に自分のものにしていこうとするのが青年期の特徴である。青年期は、その人の人生の生涯における自我のアイデンティティを形成していく重要な時期なのである。それは、児童期から継続していく側面と現実の社会的環境や青年自身が身近に接触していくなかでアイデンティティを形成されていく側面

とがある。

「自我アイデンティティとは、自我のフロンティアにおいて、児童期の継続的な危機を通して子どもに伝達される社会的現実という「環境」のはたす総合機能の結果なのだ。この意味では、アイデンティティとは、青年期の自我の最も重要な達成物であるのだ」。⁽⁴⁰⁾

アイデンティティの形成は青年期の最も重要な人格形成の要因である。アイデンティティの形成は青年期の発達の様々な側面からと、社会的な現実や地域の環境、青年のとりくむ課題状況から総合的にみていくことが必要である。とくに、社会との関係では、自己の社会的役割、地域での役割との意識形成が大切であり、このなかで青年の勤勉性や責任性が身についていくものである。とくに、勤勉性や責任性の形成において、子どもや青年が熱中していく自発的なものづくりの場面が極めて大切なのである。

勤勉感と劣等感は相対立する概念である。勤勉感が形成されていかねば劣等感が助長されていくということである。子どもや青年のものづくりを通しての自己の役割意識形成がおろそかにされ、勤勉性や社会性が身についていかないことは、劣等感を助長させていくのである。ものづくりのための基礎教育をおろそかにしての専門教育の重視は、社会との関係で自己の役割意識形成が希薄になり、アイデンティティの混乱に陥り、自発性の目標も不明瞭になる。ものづくりを通しての役割意識形成ができないことは、自分は社会に対して不適格であると感じ、道具や技術に関して絶望したりする。この問題点についてエリクソンは次のように指摘する。

「もし彼が道具や技術に関する自分の能力に絶望したり、同じような道具を使う仲間たちの間における自分の地位に望みを失うと、彼はその仲間や道具の世界の一区分と同一化することさえ断念するかもしれない。そのような「勤勉な」社会に関する希望を失うと、子どもは、道具に対する意識が薄く、家族内の競争に捉われた、孤独なエディプス時代の状態に退行することになる。子どもは、道具の世界における必要な自分の知識や技術に絶望し、また自分の身体的構造の能力に望みを失って、自分は結局凡庸に生れついているのだ、或いは不適格な人間なのだと考えるようになる。より広い社会の生産技術や経済における意義ある役割を社会が子どもに理解させる方法が重要な意味をもってくるのは、この時点においてである。家庭生活が子どもに対する学校生活の準備を怠り、或いは学校生活が幼児期の約束を支持しない場合には、多くの子どもの発達は分裂の憂き目を見るのである」。⁽⁴¹⁾

技能と道具の世界に対する最初の良好な関係が確立され、思春期が到来するとともに児童期は終わりを告げ、青年期が到来する。この青年期は、子どものときに習得した役割意識や技術を、どう自己の職業的規範意識に結びつけていくかという課題に直面する。以前に経験したことに再度挑戦しなければならないことになる。

「自我同一性の形成において、今、おこりつつある統合は、すでに指摘したように、児童期の数多くの同一化の総計以上のものである。それは、リビドーの変化と、生得的な資質から発達した適合性、社会的役割の中で与えられた機会などとの同一化のすべてを統合する自我の能力の積重ねられた経験である。したがって、自我同一性の観念は、過去において準備された内的な斉一性と連続性が、他人に対する自分の存在の意味「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積重ねである」。⁽⁴²⁾

この段階における危険は社会的役割の混乱である。多くの若い人の心を悩ますのは職業に関する同一性を固めることである。青年は自分自身が分裂することを防ぐために、徒党や群衆の中に英雄に一時的に過度に同一化する。

「青年は仲間によって肯定されることを切望し、何が悪であり、神秘的であり、有害であるかを定義する儀式や教義、計画などによって、確信を固めがちだからである。それゆえ、人は同一性を導く社会的価値を探し求める過程で、イデオロギーと特権階級の問題に直面する。その何れも、明確な世界観とすでに運命づけられた歴史の流れの中で、有能な人々が支配する地位に登り、支配が人々の中に有能な人間を作り出すという含意をもつ最も広い意味でのイデオロギーと特権階級の問題である。青年は、冷淡的に、或いは無感動になって自分自身を見失ってしまわないために、予期される大人の世界で成功するからには、それによって有能であることの義務を担うということ自分を納得させることを要求される」。(43)

(4) 青年期における民主主義的人格の形成とアイデンティティ

青年期は、自我アイデンティティにおいて大切な時期であるが、現代の民主主義的人間形成をしていくうえで、全体主義的精神と無責任性の精神の克服は極めて大切なことである。全体主義的精神は、現代社会では一般的にだれでも、その危険を内包している問題である。

集団的なアイデンティティが個人の自我アイデンティティを支持するのは、個人がどっちつかずのあいまいな状態であるときのみであるということのエリクソンは語る。軍隊では集団的なアイデンティティが最も強まっていく。しかし、軍隊のなかで育ったものが除隊すると、平時のアイデンティティになると挫折してしまう。軍隊生活の抑制や規律は、理想的な原型を与えてくれるアイデンティティではないとエリクソンはみる。

「集団的なアイデンティティが個人の自我アイデンティティを支持するのは、個人が意識的にどっちつかずの状態を維持しうる限りであり、また、次の一步はからの責任であり、かれがどこにしようとしてどこに行こうと、その場を離脱したり、逆の方向に出発したりする決定権をつねにもっているという確信を、かれがもっている限りにおいてだからである。アメリカにおいては、移住者は、引っ越したほうが良いといわれることを好まないし、また定住者は、今いる所に留まっていたほうが良いといわれることを好まない。なぜなら、各人の生活様式は、選択肢としては正反対の要素を含んでおり、その決定はまったく私的かつ個人的に自分で下したい、とだれもが思っているからである」。(44)

軍隊的なアイデンティティは、アメリカでは蔑視されて、好まれないというのである。つまり、個人的自我アイデンティティが尊重される社会なのであり、自分の生活は、自分で決定していくことがアメリカ社会の一般的傾向であると。

「虚弱な自我は、つねに打ちのめされているという感覚がある限り実質的な力強さを獲得できない。強い自我は、力強い社会によって自らのアイデンティティを保護してもらっているので、人工的にわざとおだでもらう必要はないし、またそういうことは、事実上、免疫ができています。それは、現実的なものの検証、役立つものの支配、必要なものの理解、活力的なるものの享受、不健全なるものの克服へと向かう傾向にある。同時にそれ

は、集団的自我の内部に、他者との力強い相互的な再強化作用を創造することにも向かっており、それは、その目的を次の世代に伝達してゆくであろう」。(45)

エリクソンは全体主義について、一時的な特殊なできごとではなく、近代社会移行の通信や組織技術の発展という契機のなかで、不安と依存が一般化しているなかで、どこでもあらわれる危険があることを警告している。全体主義は、社会心理的に現代社会の人類に突きつけられている大きな課題である。

どのような動機づけが、全体主義的規律になっていくのか。児童期や青年期に、どのようにして全体主義的精神構造にもっていきのか。人間は人を信じる能力をもつことによって、無力状態から高度な自由感や支配感の精神を発達させていく。人を信じ、相互依存する関係として人を見ることのみが良心を発達させる。

しかし、依存し、自由を徹底的に制限し、他の人間を容赦なく搾取することを許すことが全体主義的精神構造を生み出す基盤である。自分が依存している人々との関連で感じる無力感、見捨てられるという感じ、恥や罪への意識などが全体主義的な支配に利用される。

不安や疑惑には非合理的に心が奪われてしまう。以上のように、全体主義への精神構造について依存心という精神的な児童期の引き延ばしや不安や疑惑が全体主義にもっていかれる。依存心と不安という児童期の心理的搾取がもたらす帰結をより深く研究していく必要性を全体主義の精神構造を解明していくうえで重要であることをエリクソンは指摘するのである。(46)

全体主義の原因は、児童期の特殊な形態に求めるものでもなく、一時的な不幸や地方だけの伝染病として扱うのではなく、人間の潜在的な能力に基づいて一般的にどこでもあらわれる可能性をもっていることをエリクソンは次のように強調している。

「全体主義というものは、人間の普遍的な潜在的能力に基づいており、したがって、人間性の全側面、つまり、健康的・病的・成人的・幼児的、個人的・社会的、などの諸側面に関連しているものである、という前提から出発するものである。全体主義は、しばしば、歴史において、おそらく近似的な現実であり続けてきたにすぎないようだ。そして、「その」歴史的契機の到来をまたねばならなかった。この契機というものは、通信や組織における技術の進歩、およびその他の種々の条件によって規程されている。その条件というのは、全体主義国家という狂信的観念を生み、時宜を得た革命的行為によってその実現の便宜をはかり、現実的な暴力とテロ行為によってそれを維持するような条件である」。(47)

全体主義は特殊な精神構造から生まれるのではなく、一般的にだれでも潜在能力としてもっているものであり、近似的な現実であるのである。狂信的な観念を生み出す一般的な大衆の存在によって、暴力とテロが起きるのである。歴史的に全体主義が生まれる契機は、通信や組織における技術の進歩ということで、大衆に対して不安と依存心をあおるマスコミの現状に警戒をしていかなければならない。

さらに、それを組織した技術の発達も見逃すことができないのである。暴力とテロは、物理的な破壊行為や殺人行為ははっきりとした目にみえる存在であるが、社会心理な「暴力とテロ」はみえない。そのひとつは、科学技術の一部専門家の独占による「暴力とテロ」がある。それは、科学技術を国民大衆から切り離していくことである。

そして、一般大衆への依存心は、科学技術独占者の精神の従属性をつくりだしていく。科学の大衆化、だれでも知る権利をもち、学習する権利があるということへの知や技術に

対する民主主義を否定していくエセ「科学者」の「暴力とテロ」がある。国家の暴力やテロは、エセ「科学者」を財政誘導と金銭欲、さらに権威と支配欲を利用して、エセ「科学者」を動員してきたのである。そこでは、多くの人々の科学・技術の探求、真理への探求心を麻痺して、絶対的に依存心をつくりだしていく社会心理的な「暴力とテロ」があるのである。

この典型的な事例は、福島原子力発電の放射能汚染事故である。想定外の事故という安全神話の繰り返しであった。原子力発電のような事故がおきれば壊滅的な被害を受けるのであるが、それを覆い隠すために事故は起きないものであると安全神話をつくりだしたエセ科学者の暴力とテロ行為は重大である。極めて危険なものであるものは、安全管理を緻密に、念入りに、様々な対策をしていかねばならないことは当然である。

以前から重大事故の危険が指摘されていたことに、安全管理を怠ってきた原子力安全委員会行政や原子力を動かす企業責任者の責任放棄は、なんとよぶべきか。これは、責任放棄という「暴力とテロ」ではないか。もちろんかれら自身、「暴力とテロ行為」をしているという自覚さえ全くない。東電の役員は、半額に給料を下げたということで年俸を公表したほどである。しかし、一般国民に比して、極めて高給である。そして、相変わらずエセ「科学者」の安全神話に依存して、想定外事故をマスコミを総動員して合唱しているのである。閉鎖された特殊の専門家された職場でのアイデンティティは、一般大衆から分離したエリート主義集団の意識である。これは、社会から隔離された特権的集団のアイデンティティである。かれらの精神構造は、特権的な地位と同時に、閉鎖されたアイデンティティであるが、それが失われていく恐怖を強くもっている。

特権的なエリート集団は、アイデンティティが喪失するのではないかという恐怖をもつ。アイデンティティが侵略されたと感じるところでは、全体主義的なアイデンティティに犯されていくのである。

「歴史的・技術的發展が、伝統的なアイデンティティや、やっとな生まれつつあるアイデンティティ（農村的・封建的・貴族的）を、大規模にしかも激しく侵略しつつあるところでは、青年は、個人的にも集合的にも、危険にさらされると感じるのだ。それゆえに、全体主義的なアイデンティティ（過激な民族主義、人種主義、または階級意識）に全面的に埋没したり、また、まったくステレオタイプ化された敵の新しいアイデンティティを集合的に非難するような、そういう教義を支持する準備ができてしまうのである。アイデンティティを喪失するのではないかという恐怖心は、そのような教化を助成するが、同時に、あの正義観と犯罪的行動との奇妙な混合物の形成は、大いに寄与するのだ。その混合物は、全体主義的条件のもとでは、組織的なテロ行為や、また、大規模な軍事産業の設立にとって、利用可能なものとなるのである。アイデンティティの感覚を徐々に悪化させるような条件のもとでは、大人は青年期に選んだ選択肢に執着するので、大多数の大人は、抵抗しても全員が失敗するか、または麻痺してしまうのである」。⁽⁴⁸⁾

アイデンティティが侵略されたと感じるときは、全体主義的条件のもとで、テロ行為や大規模な軍事産業の設立に利用されていくのである。青年期に選んだアイデンティティは、大人になっても強く影響していくのである。民主主義の形成において多様性を容認した価値観が求められる。自らのアイデンティティと選択しなかったアイデンティティを寛容な精神で対応することは、民主主義的な人格形成にとって、極めて大切である。社会心理的

に協力、協同する秩序を継続的に努力してこそ、本来的な民主主義的な集団的な自我形成がされていくのである。

全体主義的な集団的アイデンティティと社会的に協同していく集団的自我の形成があるのである。自我水準は、個々においてまちまちである。その個々のまちまちな自我形成が互いに混じり合いながら、アイデンティティの選択がされていくのである。多様化する社会においては、このアイデンティティの選択は、個々の価値観、自我像形成にとって重要な過程となる。

多様化する価値をもつ現代社会において、青年がアイデンティティを選択し、葛藤から解放されていくには、それぞれの文化的価値を相互に認め合っていく社会的均衡状態が必要である。

葛藤から解放されてこそ、協同の組織を通しての協同の努力によって、各自の発達段階に即した自我形成がされていくのである。個人の自我発達が集団的自我達成に至るのは、恒常的に支持できる過程が求められているのである。

「基本的な社会的・文化的過程というものは、相互支持的な心理社会的均衡状態にあり、かつ、葛藤から解放された最大限のエネルギーを、共同の組織を通して発達、維持しようという成人の自我の共同努力のことであり、またそうとしか考えることができないのである。そのような組織のみが、各自の発達段階に即応して、成長過程にある人間や、成長した人間の自我を、恒常的に支持することができるのである」。⁽⁴⁹⁾

多様性を認める勇氣は、現代社会における個人や文明の発達にとって不可欠なことである。自己規程が多様な価値観のなかで個人や集合的な理由で、その形成が困難なときは、役割混乱の感覚が生まれる。この役割混乱は、総合的に、それぞれの価値や役割を統合していくのではなく、特定の価値や役割の選択をせまる。

社会は、個人の選択を指導し、制限する機能をもってくる。自己選択できない、自己自身の規程のないところの恐怖を、排他的な派閥やギャング集団や仲間集団を組織することによって、通過儀礼的な儀式によるアイデンティティの形成を強制する。ここには、自発的な自己画一化が起きるとエリクソンは次のように述べる。

「アメリカにおいては、青年は、幼稚な伝統主義や、懲罰的な温情主義や、国家的な施策による画一化というものから、概して免れているのであるが、しかし逆に、自発的な自己画一化というものが発達してしまっており、そのために、一見無意味でしかもつねに変わりつつ、服装のスタイルとか、身振りとか話し方などは、「体制化された人間」にとっては絶対的に「強制的な」ものとなりつつあるのである。たいていの場合、これは「他人志向型」の社会的性格と相互に支え合うむしろ陽気な問題なのだが、しかし非同調主義者にとってはしばしば残酷なものなのである」。⁽⁵⁰⁾

他人志向型の現代の都市化した社会では、服装のスタイルや身振りとか話し方まで絶対的に強制していく雰囲気がつくられていく。それは、慣習的な社会的な制度としてや、教育的な指導によって大人が強制するのではなく、青年自身によって、自発的に画一化していくのである。この自発的な画一性の社会的強制として、マスコミなどがつくりだしていく流行文化がある。それは持続性をもったアイデンティティではなく、価値体系をもった文化でもない。アイデンティティの選択ということよりも自己規程できないことへの恐怖からの一時的な精神的な支えの機能をもつことにすぎないものである。

4. 権威的ナルシズムと拝金主義的非倫理

(1) 現代の拝金主義とモラル問題

現代社会は、若者たちに拝金主義がはびこり、金銭のモラル教育が十分にされているとはかぎらない。金銭に絡む青年の社会的モラルが十分にできていないのである。現代はインターネットによる詐欺が多い。犯罪白書では、この問題について次のように述べている。「近時の詐欺の急増要因の一つは、振り込め詐欺の多発にある。振り込め詐欺とは、いわゆるオレオレ詐欺（親族を装うなどして電話をかけ、会社における横領金の補てん金等の名目で預貯金口座に現金を振り込ませるなどの方法による詐欺事件（恐喝に当たる事件もある）をいう。架空請求詐欺（郵便、インターネット等を利用して、架空料金を預貯金口座に振り込ませるなどの方法による詐欺事件）（恐喝に当たる事件もある）。

融資保証金詐欺（実際には融資しないのに、融資するように装った内容の文書を送付するなどして、融資申込みをした者から保証金等の名目で預貯金口座に現金を振り込ませるなどの方法による詐欺事件をいう。）及び還付金等詐欺（税務署や社会保険事務所等を装い、税金や医療費の還付等に必要な手続を装って口座間送金をさせるなどの方法による電子計算機使用詐欺事件をいう。）の総称である」（犯罪白書平成二一年度）。

青年たちの詐欺集団の出会い、摩擦無く、葛藤なく行われているのもめずらしくない。勝ち組と負け組という激しい競争社会のなかで、自分の夢と希望に挫折した劣等感にあえぐ青年は、自分の立場からみて巨額な金銭を得ることによって、消費と快楽によつての権威的ナルシズムを謳歌することができるのである。青年を犯罪に走らせる組織暴力団ばかりではなく、様々な社会的な詐欺集団が根強く存在していることが大きな社会的背景である。このことから、金銭欲に絡む犯罪に走る若者が後を絶たない。

ここでは、金こそがすべてであるという価値観を若者に注入している。この価値観によつて、組織を支配する。楽をして、確実な巨額な金儲けをしようと、詐欺に走る若者たちは少なくない。それは、現代日本の市場絶対主義による弱肉強食の競争社会の病理現象である。ここでは、詐欺という悪質な社会的犯罪行為が、ひとつの仕事感覚で行われているのである。また、深く関与していないが、詐欺組織の下働きをする若者がアルバイト感覚で詐欺集団に加わるのもめずらしくない。全く犯罪とは無縁な若者が巻き込まれていくのである。

アルバイト感覚の詐欺は、若者たちに重大な犯罪をしている意識が、極めて薄い。ここでは、社会的な倫理や市民道徳的な感覚が育てられていないことをみるのである。つまり、詐欺という行為、すなわち金銭的に騙すことへの特別な意識をもたず、相手の不注意、契約の甘さに詐欺行為を相手の責任に転化してしまう。自己への犯罪を起こしている心の葛藤という問題すら薄く、ゲーム感覚の金銭のやりとりしか感じない場合もある。これは、少年期から青年期にかけての金銭をめぐる信用や社会的契約の大切さの教育がおろそかにされている結果であり、社会全体の拝金主義と、収入などの金銭高によつて人の価値を見ていこうとする社会的風潮の反動でもある。

詐欺師たちは、一時的な巨利を得ることによって、消費的に快楽に走る。高給マンションや高給車を乗り回し、すべてが個人的な快楽の消費に使い果たす。そこには、貯蓄や計

画的な仕事からほど遠い。

(2) 善意と正義の形成

子どもは善意と愛情、さらに正義を信じる人生を始めるのであるが、子ども時代、青年時代を通して、善意と愛情のなかで育ってこなかった人にとって、信頼感それ自身がなく、裏切られる体験の積み重ねによって育ってきた場合もある。そこでは、一層に自己に頼るようになり、信頼すべき人々を見いだせない。裏切りと失望の傷跡を心の奥に深くもっている人は、人生それ自身を恨むことをフロムは次のように述べる。

「信ずるに足る人や物がなく、善と正義に対する信頼感がすべて愚かな妄想に終れば、人生が神よりむしろ悪魔の支配を受けているように思われ—その結果、人生は憎むべきものとなり、もはや失望の苦痛にたえがたくなる。人生は悪で、自分自身は悪だ、と誰にでも証明したくなる。人生を信じ愛することに失望した人は、こうして世にすね世間を破壊する人になる。この破壊性は絶望感の一種であり、人生に対する失望感が人生を憎悪するという結果を導いたのである」。(51)

善と正義を信じる人生がなければ、一層に悪魔に支配を受けるようになる。人生に対する失望感が憎悪を作り出し、破壊性と絶望性をもつようになるのである。信頼感の喪失によって、社会生活を送るようになるのである。幼児から形成される人間にとっての基本である信頼がもてなくなる関係は、非人間的な精神状況である。

信頼がなくなる精神的な状況は、人間にとっての生産的な前向きなことができなくなる。この克服のためには、生産的な関係にいかにして導いていくかということである。人間としての基本的信頼がなくなっていくと破壊性とサディスト的な人間になっていく。人間に本来的に備わっている創造の潜在力を失わせていくのである。この問題について、フロムは次のように述べる。

「代償的破壊性を治療する唯一の方法は、人間の内部に存在する創造のポテンシイ(潜在力)、つまり彼の人間的な力を生産的に利用しうる能力を発達させることである。人間が無力でなくなるとはじめて、人間は破壊者やサディストでなくなり、人間が生に興味をもちうる状態だけが、人間の過去から現在にいたる歴史を恥ずかしめたその種の衝動をなくすことができる」。(52)

基本的な信頼を失っていく人間は、自己しかみえない世界に入っていく。それが、理性をもった合理的な判断ができないようになっていく。自己の愛着が最も危険な状況になるのは、合理的な判断ができない精神的な状況であるとフロムは次のように述べる。

「ナルチスティックな愛着が最も危険な形となってあらわれるのは、合理的判断を歪めるということである。ナルチスティックな愛着の対象は、客観的な価値判断に基づくのではなく、それが私または私のものであるが故に価値がある(善い、美しい、賢いなど)と考えられる。ナルチスティックな価値判断は、偏見に基づくがゆえに歪んでいる。一般には、この偏見は何らかの形で合理化され、この合理化はその人の知性と詭弁の程度によって、多少なりとも誤魔化されやすいのである」。(53)

ナルチスティックな人は自分以外のもの、自分のものでないものに偏見に満ちているのである。異質で自分以外のものは、劣等で、危険で不道徳であるとみる。ナルチスティック

クな人は非常に歪められた人間として、自分以外の世界に関係をもたず、ひとりぼっちになるのである。孤独感と恐怖感をもっているのである。自分の世界がおびやかされると感じたときは、自分の全存在が否定されると恐怖をもつ。その恐怖は激しい怒りとなって現れるとフロムは分析する。⁽⁵⁴⁾

5. 孤独の解放と人間的連帯における愛の役割

(1) 青年期と愛の能力形成

フロムは愛について学ぶことを強調している。愛に対する能力を求める。どうすれば人を愛せるようになるかを学ぶ必要があるとする。人間の愛情は、本能的な適応の世界から抜けだし、理性を発展させ、自然から引き離すところに特徴があるとする。

「人間は理性を授けられている。人間は自分自身を知っている生命である。人間は自分を、仲間を、自分の過去を、そして未来の可能性を意識している」。⁽⁵⁵⁾

理性をもっていることは人間存在の本質である。愛という最も人間的行為は、理性そのものである。理性のない「愛」は本能的な性欲からであり、人間の幸福達成で大切な絆や連帯心につながっていかない。むしろ、人間関係を破壊していく。人間にとって、恐ろしいことは孤立という意識である。フロムは、この問題について次のように指摘する。

「孤立しているという意識から不安が生まれる。実際、孤立こそがあらゆる不安の源なのだ。孤立しているということは、他のいっさいかあらゆる切り離され、自分の人間としての能力を発揮できないというおとである。したがって、孤立している人間はまったく無力で、世界に、すなわち事物や人びとに、能動的に関わることができない。つまり、外界から働きかけに対応することができない。このように、孤立はつよい不安を生む」⁽⁵⁶⁾

理性のない「愛」は偽りの愛であり、偽善的なものである。それは、動物的な本能であるというのがフロムの見方である。人間は理性を基本にする愛によって、人間的幸福の達成である絆や連帯をもっていくということである。孤立は、人間的絆や連帯を破壊し、不安をつくりだしていく。人間の孤立した存在は愛によって結ばれることがないのである。人間どうしの他者との融合の継続的な一体感は、愛によって達成することができる。

「愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかけることである。この積極的な配慮のないところに愛はない。……愛の本質は、何のために働くこと、何かを育てることにある。愛と労働は分かちがたいものである。人は何のために働いたらその何かを愛し、また、愛するもののために働くのである。配慮と気づかいには、愛のもう一つの側面も含まれている。責任ある。今日では責任というと義務、つまり外側から押しつけられるものと見なされている。しかしほんとうの意味での責任は、完全に自発的な行為である」。⁽⁵⁷⁾

愛とは愛する者の生命と成長に気にかけるということであり、人間の尊厳で愛する人の成長を気にかけることである。そのために愛する人のために働く。愛する人の責任性は何か。フロムにとって、責任は、愛する相手の尊敬からはじまる。そして、その人がその人らしく成長発展してゆくことに気づかうことである。

「尊敬がかけていると、容易に支配や所有へと墮落してしまう。……尊敬とは他

人がその人らしく成長発展してゆくことに気づかうことである。したがって尊敬には、人を利用する意味はまったくない。私は、愛する人が、私のためではなく、その人自身のために、その人なりのやり方で、成長してほしいと願う。誰かを愛するとき、私はその人と一体感を味わうが、あくまでありのままのその人と一体化するのであって、その人を、私の自由になるような一個の対象にするわけではない。いうまでもなく、自分が独立していなければ、人を尊敬することができない」。(58)

愛するものどうしの一体化は、一方が容易に支配や所有へと墮落していくという危険を持ちやすい。愛による人格を無視した関係は、相手を奴隷化する現象である。自己の肉体の延長として自由に相手を支配し、所有していくことである。獣ではなく、人間的な愛を求められるならば、相手の人格の尊重、相手に対する尊敬が絶対不可欠である。相手の人格の尊重のない一体化は、一方の奴隷化になるのである。尊敬ということを愛のなかで深くみつめていくことが必要になっていくことを決して忘れてはならない。

ところで、人を尊敬するには、その人自身を深く知らなければならない。その人を深く知るためにも人間の尊厳のなかで深く考えていかねばならない。フロムは、尊敬と知ることを次のようにのべる。「人を尊敬するには、その人のことを知らなければならない。その人に関する知識によって導かなければ、配慮の責任も当てずっぽうに終わってしまう。いっぽうの知識も、気づかいが動機でなければ、むなしい。他人に関する知識にはたくさんの層がある。愛の一側面としての知識は、表面的なものではなく、核心にまで届くものである。自分自身にたいする関心を超越して、相手の立場にたってその人を見ることができたときにはじめて、その人を知ることができる」。(59)

愛する人を知るということは、孤立化から人間的絆や連帯につながっていくが、相手の立場にたって物事をみることは大切なことである。また、配慮の責任や尊敬は、相手を深く知ることなしに、それらをもつことができないのである。

(2) 青年期における真の愛と偽善の愛のみきわめ

青年期は、真の愛をみつめることができる大切な時期である。偉大な愛の力と現代社会の悪魔による偽善の愛の奴隷化がある。人間的な愛の本質をみつめることは現代の青年にとって重要な課題である。青年期にとって、配偶者を選ぶことは人間発達ということからも重要な課題である。配偶者を選ぶうえで、男女における愛情をどう考えていくか。この前提を考えて、配偶者の選択の志向を深めてことが必要である。さらに、普遍的には人間が生きていくうえで、愛とはどのような意味をもっているのか。

人間には、愛ということがなにゆえに与えられているのか。人間の本質論から、愛を考えていく契機に男女の愛はその本質を教える。男女の愛は、人間性の発達を考えていく重要な契機になる。現実の男女の愛の行為はお互いに感情が支配していく。感情に流されて配偶者を選択しがちになる。青年期の教育として、理性的な男女の交際を考え、配偶者選択への心の準備をしていかねばならない。

人間は意識をもって、自然を認識し、社会を認識し、文化をもって、豊かな精神と物質をもって、幸福を達成する。そのために、新しいものを常に創造する。愛と認識は切り離せない。そのようにみる愛は、最も人間的な行為である。倉田百三は、この問題について

次のようにのべる。

「愛の源泉は何であるのか。それは認識である。認識を透して、高められたる愛こそ生命のまことの力であり、熱であり、光である。……愛は主観が客観と合一して生命原始の状態に帰らんとする要求である。欠陥ある個人意識が独立自全なる真命に帰一せんがために、己に対立する他我を呼び求める心である。人格と人格を抱擁せんとする心である。生命と生命とが融着して自他の区別を消磨しつつ第三絶対者において生きんとする心である。それ故に愛とは別種の精神作用ではない。認識の究極の目的はただちに愛の最終の目的である。我等は愛するがためには知らねばならず、知るがためには愛しなければならない」。(60)

倉田百三は、愛と認識の同一性を強調するのである。物事の本質を知るには、それを愛さなければならない。認識の究極の目的は、愛の最終目的であるという立場である。花の真相を知る植物学者は、自ら花にならなければならない。愛は認識的努力をすることができるのであり、そこに愛の生命力がある。

さらに、倉田百三は、性欲と愛の違いについて強調する。肉交は、相手の運命を考えないものである。肉交は愛の表現ではない。女に性欲を起こしている男は、女を祝福していない。「強姦するものは女が抵抗するだけ性欲が興奮する。猫が鼠が食う前に弄ぶときの心と、男子が自分の犯す女を肉交する前にいろいろ悪戯する心とは酷似している。すべての征服の意識は性欲を興奮させる。……殺人と肉交とははなはだ酷似したる罪悪である。しかも肉交は殺人より、もっと質の悪い罪である。そして人間の魂は前者よりも後者において一層その品位を傷つけている」。(61)

性欲がひとり歩きしたときのおそろしさを倉田百三はのべているのである。倉田百三にとって性欲の肯定は、宗教の摂取の道によってであるとしている。宗教の摂理の道によって、自己の心を清浄しながら性欲を愛によって位置づけていくことは大切なことである。

女性の社会的地位が低く、男性優位の社会のなかで、男性にとっての征服欲が助長されて、相手の女性に悲劇を生んでいく事例は少なくない。

女性は、子どもを産み育てるということから、性欲の問題は、永続性をもった愛を求める。愛が永続性の可能性を強く求めるのは、女性の子どものを産み育てるという本能からである。男性は一時的な快楽によって、子どもを育てる責任は、本能的にもっていない。支配欲、征服欲によるその場、その場のあるがままの欲望によっての生きる姿は、愛をもつ人間的精神の墮落に落ち込んでいく。

男性の性欲を宗教の摂理という倉田のことばを借りるならば、女性が子どもを産み育てるという人間の尊厳を深く学び、責任をはたしていくという人間的高まりのなかで、愛の醸成がされていくのである。

男女の交わりは、自らの欲望の前に、互いに求め合うことと、響き合いを摂理によって、確認することが求められている。人格と人格の結び合いは、愛の認識によって醸成されていくものである。愛は同時に学びを求められる。このことは、とくに男性に強く求められる。

男女の愛を考えていくうえで、子どもを生むことは女性だけにできるものである。このあたりまの事実を深くみつめることが大切である。子どもを育てることは、多くの困難をもつ。子どもを産むことのできない男性は、子どものことに無責任に陥りやすい。意識的

な責任性を社会は男性に求められている。子どもを育てることは男女の共同の仕事であり、経済的には、男性の役割が大きい。生存していくうえで、男性の役割責任は、大きくあることを決して忘れてはならない。愛は、永続性をもつものであり、子どもを生み育てるといふ人間のもっている本能から与えられているものである。

人間に与えられた自然の摂理は、性欲に愛を求めたのであるが、男性の征服欲、支配欲の快楽主義の拍車は、その自然の摂理から独自に性欲を展開させたのである。人間の自然の摂理は、家族や家庭をつくることを求めたのである。

人間は一人で生きることができない。このことによって、癒しの場に家族や家庭を神の自然の摂理は、与えたのである。この癒しは、愛の絆によって深めていくのである。男女の愛が結婚ということから家族や家庭という社会制度をつくりあげたのは、子どもを生み育てるといふことと、人間の癒しの場として、自然の摂理が作りあげたものである。

結婚は、配偶者や子どもを縛りつけるためではない。また、男性の支配欲、独占欲によって、女性を家庭奴隷にするためではない。従って、心の問題を含めて、あらゆる形態の家庭内暴力や奴隷状態になっている家族や家庭から女性や子どもが解放されるような社会的しくみが要求されている。家族や家庭は極めて閉鎖社会になりがちであり、プライバシーの世界として、家庭内暴力や奴隷状態からの解放に難しい問題がある。

武者小路実篤は、人間は種族保存ということから過度に性欲があたえられたとして、自然が人間に恥ずかしがることを与えて、その統制をした。秘密性があることのために人々は墮落しない。無責任に子どもをつくらないために、それを自然界が与えたものであるとする。そして、性欲と恋愛の違いについて次のようにのべる。

「恋愛と性欲のちがいは、性欲には相手を尊重する必要はないのだ。相手の運命を気にしない。子供のことなど考えない。だから獣的なものと言われる。恋愛は相手を崇拜する。相手の運命を気にする。理想的だと思う相手にのみ起こる。性欲は相手を軽蔑しても起こりうるが、恋愛は最上の異性と思うものに対して起こるのだ。だからつまり自分がつくり得る最上の子をつくり得る相手にのみ起し得る感情だ」。(62)

武者小路実篤は、性欲と恋愛の違いについて明確にのべている。恋愛は相手の人格を尊重し、相手の運命を気にして、生まれてくる子どもの期待と責任をもつという感情である。性欲は相手を尊重しないことであり、子どもに責任をもたないことである。

愛は、相手の人格を尊重することであり、相手の運命と生まれてくる子どもに責任をもつ感情である。それは、人間的な認識から離れるものではない。

性欲は、相手の人格を無視したり、生まれてくる子どもに責任をもたないという、その場しのぎの欲望であり、動物的欲望である。しかし、人間は意識をもつことによって、この動物的欲望を自然界から離れて、独自に継続し、相手を支配することがある。これは、偽善的な「愛」の行為である。意識的に自己欲望に支配されることで、自然界の動物よりも場当たりの無責任になる。自然界には、自然の掟があるが、偽善的な「愛」には、掟がない自己欲望のみの世界になる。

愛の行為は、もっと人間な崇高なものである。人間の成長にとっての愛の役割とは。人間の尊厳と愛の関係とは。この問題を考えていくうえで、愛の論理を深めることは重要なのである。人間は、愛という行為をもって、相互に扶助をし、奉仕的精神をもつ。

ときには、愛するための人に自分を投げ出し、自己犠牲的になることもある。愛は、家

族や地域、社会的な人間関係をもって人間的に生きることである。

愛は人間の精神が最も高まることであり、人間を鍛えていくものである。武者小路実篤は、この問題について次のようにのべる。

「もう一つの恋愛の特色は、両方で、自分を立派な人間にしようと努力することだ。相手に好かれたい、相手に尊敬されたいとなれば、勢い自分を立派な人間にしないわけにはいかない。其処で発憤する気になる。心が鍛えられる。責任を感じることで、実力を養うようになる。恋愛は人間が独立する資格が出来る時分に、感じるものだが、同時にその時に、一番人間の精神のかたまる時だから、抜け目のない自然は恋愛させると同時に、人間を鍛えることを忘れない。喜びや、快楽を与えるかわりに、それだけ責任の持てる人間に仕上げるように心をつかっている」。⁽⁶³⁾

恋愛は、相手に尊敬されたい、責任を感じるということが、人間的に高まっていくことを武者小路実篤は強調しているのである。恋愛は人間として独立していく契機になるのである。恋愛をしているということは責任をもてる人間になること、相手を尊敬されたいということで、互いに大いに人間的に高まっていくことなのである。

恋愛しているのか、または、単なる異性との関係を性欲のみの対象なのか。恋愛を冷静に人間的な認識をもってみるのが大切なのである。恋愛をしているという錯覚が、実は性欲による異性への感情という場合も少なくない。

責任をもつということは、互いに家族として、生存の現実のなかで、協力して生きていくということであり、男女が互いに相手を尊重し、相手に責任をもつことと同時に、生まれてくる子どもに責任をもっていくということである。結婚して家庭をもつことは、責任をもっていく基礎である。家庭なくして、夫婦の協力関係はない。

亀井勝一郎は、愛することと考えることを同義語としている。「人間と人間との結合との、基本的で最も具体的な結合とは、かかる邂逅によって結ばれた友情（恋愛も含めて）なのです。社会の根底をなすのは友情です。真の社会性とは、友情性のことで、人は邂逅することによって愛することを知る故にそれは愛の表現と言ってもよく、私は人間関係の基本をここにみるのであります」。⁽⁶⁴⁾

亀井は、愛することの人間関係の基本として、友情をおいている。それは社会の根底をなしていくものであると。

人間は、社会的な人間関係をもって生きるという本質をもっていることから愛の力を神から与えられたとしている。その本質ゆえに、孤立していくことは絶えがたい精神的苦痛をもつ。現代社会の非人間な状況のなかで、愛を求め、愛に飢えるということは、人間性の回復の欲求である。

現代社会の群衆化した精神的孤立は、非人間的な現象である。現代社会は、隣の人との会話もなく、誰もが群衆のひとりになって、家族や地域の連帯をもたない状況がある。

自由な都市化した大衆化現象は、愛の自己犠牲性を巧みに自己の欲望手段に利用することさえみられる。相手を愛のとりこにマインドコントロールしていくのである。

異性に対する愛は、様々な個性をもつ人間関係のなかで育っていく。異性の真の愛は、グループのなかで、友人同士のなかで自由に個性をみながら、人格のふれあいのなかで愛が育っていく。

人間は多様な人間関係で異質の血縁を求めてきたのである。社会学者のデュルケームは、

原初的な宗教のトーテミズム研究で、血縁を嫌うことの大切として、トーテミズムの役割を示しているが、人間の種族の維持にとって、多様性、異なる種の交わりを強調している。

現代は孤立化したなかで、異性の愛を求めるケースが少なくない。仲間のなかで愛が育っていくという経過も難しくなっている。異性の愛が先にあり、結婚詐欺にみられるように、最も人間的な愛の心情をたくみに利用して、金銭欲に走るのである。

また、性によるマインドコントロールによって、女性を家庭奴隷に落とし込むことも少なくない。女性の特有な子どもを生むということが、女性を奴隷化する手段に利用される。女性が、社会的に子どもを育てなければならないという心情を巧みに利用しての奴隷化である。

子どもを生み育てるという女性の人間としての尊厳が否定され、家や男性の利用手段にされる。嬰兒殺しの悲劇なども女性としての苦悩の選択のひとつの例である。子どもを生み育てるということは、女性の大きな喜びであり、子どもは最も人間的な絆であり、子育ては家族や地域の輪、連帯性を作り出す役割をもっている。

偽善的愛による女性の奴隷化の手段は、恐怖と不安の心情をつくりあげていくことである。恐怖と不安は、性も含めての暴力的なものばかりではなく、マインドコントロールからの不安と恐怖からの従属がある。それは、経済的な従属からくるものもあり、暗黙も含め周囲の誹謗中傷から仲間はずれになることへの不安、無視に至る恐怖という精神的な圧迫があるのである。

日本では古くから駆け込み寺があったが、現代でも家庭内奴隷になっている女性を保護する社会的施設が大切になっている。偽善的な「愛」の現実が少なくないなかで、恋愛とはなにかを真剣に若者として考えていくことは大切な時代になっていることを重視しなければならないのである。

まとめ

責任感とは個々の自由意志に基づく社会的約束を履行していく感情と行動力である。責任感とは近代的な人間尊厳の社会契約から人間的に生きる力をつけていくうえで、大切な課題である。本稿の問題意識は、責任感はどうにしてつくられていくかということであった。このことから、青年期の社会的自立と責任感の形成を問題にしたのである。社会的自立ということから「働き方」の教育は重要な意味をもっている。

青年期の自立のなかで、職業についていくことは大切な課題であり、職業選択をしていくことは、青年期の成長にとって必要なことである。本論では、責任感と仕事の間接的な関係についても重視した。この責任感の形成が、弱肉強食的な競争主義による利己主義を奨励するという社会的風潮や、偏差値的教育のなかでのランクされていくのかで、歪な立身出世主義が青年の中にはびこり、青年本来の未来に対する創造的な情熱や正義観が損なわれている。このことと関連して、本稿では、現代な無責任社会の状況も直視した。

青年期の責任観の形成にとって、青年期特有に現れる知的自己中心性からの解放が大切であった。現代は、幼児期の感覚的な自己中心が少年期における遊びの経験などによる克服過程が十分に育っていない時代的傾向もあって、幼児期と青年期の自己中心の両面を

もっている青年も少なくない。現代における青年期の仲間集団形成は特別の意味をもっている。

青年期のもっている仲間集団と関係づけながら責任感の形成があり、大人から管理主義と徳目的に押しつけられて形成されるものではない。青年期の自発性による責任感形成が必要である。さらに、青年が幅の広い教養性をもっていくことは、適切な判断力と決断力をもっていくうえで、大切なことであり、この意味からの責任感形成も重要である。

青年期の発達課題としての社会との関係の人生観形成が不可欠である。人生観の形成は、個人的な趣向だけではなく、社会との関係をもつて、責任感をもつての人生設計がつけられていくのである。青年期の価値の選択は、自由性を伴っていくことが近代の市民社会にとって必要なことであるが、個々の社会的役割を自覚しての価値の選択の側面もあるのである。

青年期はアイデンティティの危機を伴う。青年たちの学びの環境にとって、人間的信頼の形成も大切なことである。青年期のアイデンティティの危機は、歴史の変動のなかで位置づけられる。ところで、勤勉感の成長は歴史的にも大きく異なる。しかし、人間にとって、ものづくりは極めて大切な要因であり、日本では、ものづくりが青年教育として積極的に展開された歴史的な特徴をもっていた。このものづくりの大切が揺らいでいるのが現代の青年期の特徴である。さらに、青年期における民主主義的人格の形成にとって、アイデンティティの危機はきちんと対応していくことが求められている。青年期に身につけた人間的な性向は、その後の人生に大きく影響していく。

民主主義的人格の性向をもった環境で育つ青年たちが多いことは、その社会の民主主義形成に大きく貢献していくのである。権威的ナルシズムと拝金主義的非倫理は現代の民主主義を考えていくうえで、警戒すべき大きな課題である。現代の拝金主義は青年のモラルを大きく崩壊させていく要因になっている。

現代は管理主義と競争主義のなかで孤独な人間を作り出す条件が大いにある。その非人間的な孤独からの解放において、いかに人間的連帯をつくりあげていくのか。この人間的な連帯をつくっていくうえで、人間が本来的にもっている愛の役割を引き出していくことは大切なことである。青年期は、人間的な愛の能力形成が最も花開く時期である。しかし、この人間的な愛の花開く青年期においても真の愛と偽善の愛があることを見極めなければならないのであった。

【注】

- (1) ジョン・ローズ、矢島鈞監訳「正義論」紀伊國屋書店、270頁
- (2) 瀧川祐英「責任の意味と制度」勁草書房、16頁～20頁
- (3) ヤスパース、橋本文夫訳「責罪論」理想社、43頁～44頁
- (4) 瀧川祐英、前掲書、25頁
- (5) 常松淳「責任と社会—不法行為責任の意味をめぐる争い」勁草書房、9頁
- (6) 前掲書、257頁
- (7) ウェバー政治社会論集、世界の大思想23巻「職業としての政治」、河出書房、426頁
- (8) ルソー全集第5巻、作田啓一訳「社会契約論」白水社125頁～126頁

- (9)前掲書、137頁
- (10)ピアジェ・滝沢武久訳「思考の心理学」みすず書房、83頁
- (11)前掲書、84頁
- (12)前掲書、87頁～88頁
- (13)前掲書、90頁
- (14)前掲書、93頁
- (15)前掲書、93頁～94頁
- (16)ハビガースト・庄司雅子訳「人間の発達課題と教育」玉川大学出版、123頁～124頁
- (17)前掲書、125頁～126頁
- (18)前掲書、135頁
- (19)前掲書、138頁
- (20)前掲書、140頁～141頁
- (21)前掲書、146頁
- (22)前掲書、147頁～148頁
- (23)前掲書、154頁～156頁参照
- (24)前掲書、158頁
- (25)前掲書、160頁
- (26)前掲書、162頁～163頁
- (27)前掲書、173頁参照
- (28)前掲書、175頁
- (29)前掲書、175頁-176頁
- (30)E.H.エリクソン・仁科弥生訳「幼児期と社会1」みすず書房、320頁
- (31)前掲書、321頁
- (32)E・H・エリクソン・岩瀬庸理訳「アイデンティティー青年と危機」金沢文庫、5頁
- (33)前掲書、16頁
- (34)前掲書、21頁～22頁
- (35)前掲書、29頁～30頁
- (36)前掲書、87頁～88頁
- (37)前掲書、160頁～163頁参照
- (38)前掲書、89頁
- (39)前掲書、167頁
- (40)前掲書、294頁
- (41)E.H.エリクソン・仁科弥生訳「幼児期と社会1」みすず書房、334頁
- (42)前掲書、336頁
- (44)前掲書、338頁
- (45)前掲書、80頁
- (46)前掲書、90頁～91頁
- (47)前掲書、94頁
- (47)E・H・エリクソン・岩瀬庸理訳「アイデンティティー青年と危機」金沢文庫、83頁
- (48)前掲書、110頁～111頁

- (49)前掲書、313頁
- (50)前掲書、108頁
- (51)エーリッヒ・フロム「悪について」紀伊國屋書店、27頁～28頁
- (52)前掲書、32頁
- (53)前掲書、92頁
- (54)前掲書、94頁～95頁
- (55)エーリッヒ・フロム鈴木晶訳「愛するということ」紀伊国屋書店、23頁
- (56)前掲書、23頁～24頁
- (57)前掲書、49頁～50頁
- (58)前掲書、51頁
- (59)前掲書、52頁
- (60)倉田百三「愛と認識との出発」清龍社、60頁～61頁
- (61)前掲書、181頁
- (62)武者小路実篤「人生論・愛について」新潮文庫、68頁～69頁
- (63)前掲書、71頁
- (64)亀井勝一郎「愛の無情について」講談社25頁